尾崎喜八資料

第 5 号

特集 自然についてのエッセイ

老の山旅／尾崎喜八――――2
雲は流れる……(草野心平さん追悼)／伊藤海彦――――3
山本太郎君のこと／富士川英郎――――4
尾崎さんと白菅会／川崎精雄――――5
尾崎喜八記念館設立に寄せて／中山政市――――6
研究と資料――――8
自然についてのエッセイ
自然の中／武蔵野に光る秋／窓を叩く鳥／五月のメドレイ
早春の山郷／山あるき／峠の早春／山麓の村／山峡の春
早春の田園／遅れた春の日々から／Wild Lifeの本／初心者を山へ／第二章 雲
資料と回想――――26
尾崎喜八と戦前の職業野球
こころざし／尾崎喜八
セネタース時代の思い出／苅田久徳
附 記／尾崎栄子
*
新聞・雑誌掲載目録(五)昭和三十五年～四十九年――――31
同・附記／嘉納忠明
この一年のできごと／その他――――36
*
表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会
1989年2月

自画像／昭和８年11月29日

老の山旅

久しぶりにすつぽりと
深く穿いたしなやかな強い山靴、
老いにせばまつた両肩を大きくひらき
まがつた背骨をまつすぐにする
厚いルックザックの適度の重み。――
今日私は山へ行く、
あゝ　山へ、久しぶりに、
杖を小脇に。

「気をつけて！」とか「無理をしないで！」とか、
娘よ、妻よ、そんな心配はもういらない。
氷雪の山、岩登りの山は昔のこと、
今私の行くのは春の山だ。
白い岩うちわ、黄色い山吹、
水がしたたり、苔がきらめき、
森の奥から黄びたき、日雀（ひがら）の声のひびく
木山、藪山、春の山だ。

青い蛇紋石の崩壊斜面や、
牛の角いろのいろんなチャートが
きれいな露出を見せている午前の溪谷。
時々おおるりの歌を聴きながら
そんな世界を楽しみつつ登つて行くと、
とつぜん現れた峠のむこうに
雲を浮かべた隣国の山々谷々のひろがる風景。
そういうのが今日の私の山旅だ。

青春のさかんな体力が衰えると
老年の豊かな創造と智恵の力がこれに代る。
よく連続した時間による人間の完成は
青春から老年へと大きく懸かつた
一本の美しい虹の弧線だ。
若い時代の強力な閃光と老境の柔和な輝き、
それらはいずれも震動する光の波として
この華麗な虹の内部に反映している。

久しぶりに今日私は山へ行く。
どんな遭遇、どんな見ものも
私はけつして見落とさず、軽んじもしない。
私は美に満ち意味に満ちているこの世界が
又大きな謎でもある事をむしろ喜ぶ。
そしてその脈々と波うつ謎のおもてへ
自分の思惟と智恵とを投影するのが私には楽しい。

（帯広営林局・局報「樹氷」昭和三十一年三月号）

撮影：尾崎喜八／昭和９年

雲は流れる……

――草野心平さん追悼

伊藤海彦

十一月十二日、草野心平さんがとうとう亡くなった。この「とうとう」という一見ありふれた言葉も心平さんの場合にはいろいろな意味をになっている。誰もがいつかは互いに別れなければならぬのだし、心平さんはすでに八十五歳だったのだから、とうとうその時がやってきたということでもある。そしてまた、生前さまざまな病気をし、その上何度か大怪我（けが）までしながらその度にけろりと元に復しては作品を書きつづけた人が、とうとう今度ばかりはだめだったのかという思いでもある。しかし今、いちばん私を寂しくさせるのは、あの顔ぢゅうくしゃくしゃにした笑顔とふしぎな土のぬくもりのように私を包んでくれたあの手がとうとう消えてしまったというそのことである。

詩人草野心平の作品については、これからさまざまな人が書くだろうし、私にしても少年の日に出会ったなつかしい作品について書きたい思いが多々ある。だがそれにはもうすこし――心平さんの姿が作品のかげにかくれるまでもうすこし時を置きたい。今はただ、私的な思い出のかけらを書いておくことにしよう。

昭和三十二年、私の結婚式で心平さんは片山敏彦さんや藤原定さんと共に私達夫婦への祝婚歌として詩を朗読して下さることになっていた。（ちなみに仲人は尾崎喜八夫妻、式の進行をうけもって下さったのは串田孫一さんである。）所が心平さんは遅刻して式が終るまで遂に姿を現さなかった。続いて野上彰の司会による当時としては賑やかな披露パーティーになったが、心平さんはそれが始まった頃あたふたとかけつけ、私の手を握った。そして、パーティーの最中にあの独特のなまりをもった、少し嗄（しわが）れた声で詩を読んだ。それは驚いたことに原稿用紙などではなく広告の紙の裏にペンでさっと一気に書き流した詩だった。その頃私は放送関係の仕事でいささかいい気になって書いていたから、放送局の技術屋さん達が何人も来てくれてたっぷり二時間も録音をした。「雲は流れる。その永遠。……」と始まるその祝婚歌はきれいに収録された。あとで知ったのだが、そんなにぜいたくな技術屋さん達がきていたというのに録音は披露宴のみで式の方はしていなかったのである。喜八夫妻を始め一同をひやひやさせた心平さんの声は、その遅刻のおかげでテープに残っている。ずっと心平さんのふところに無雑作に押しこまれ、皺くちゃになっていた詩と共に。

その生き方は対照的ともいえる程ちがっていたが、心平さんの尾崎喜八に対する敬愛の念は深いものがあったし、喜八もまた心平さんの豪放さの蔭にある細やかな優しさを愛していた。心平さんはその著「私の中の流星群」の中で喜八火葬の折の情景から筆を起し尾崎家への並みなみならぬ親しさを語っている。その文章の終り近くに記されているが、「歴程」の「尾崎喜八追悼」編集を秋津の心平さん宅でした夜のことは忘れ難い。心平さんはその時、表紙にする「尾崎喜八」という文字

を書いたのだが、洋筆でしかも穂の根まで折れよとばかり紙に押しつけて書くのをみて私はびっくりした。喜八の「喜」が難かしいといいつつ何度も書き直し、最後にこれはと思うものを三枚ほど部屋の隅に並べてまわりの人の意見をきいた。(この「資料」の題字も心平さんが快よく書いて下さったものである。)…ところで、その文章にも書かれているように、入院中だった心平さんは病室に戻らねばならず、さんざん駄々をこねたあげく私と共にタクシーにのった。酔いのまわった心平さんは「寂しいね」と何度もくりかえし、両の手で私の手を包みこみながら喜八との思い出につながるラ・ノルマンディーを歌った。私にとってもそれは少年の日につながる特別の情感を誘う歌だったからいっしょに声に出した。しかし歌うほどに心平さんも私も互いに胸がつまり、とぎれとぎれになった。心平さんはやせた私にもたれかかり子供のように「尾崎さんはいい人だったなア」とつぶやいた。私は言葉もなく心平さんの手を握りかえした。その心平さんの体の重さの、なんと快よかったことか。

訃報の伝えられた翌日から、いくつかの新聞に心平さんの死を悼む文章が載った。そのいづれもが作品の力強さにふれていて、それぞれうなづけるものではあったが、その豪快さの背後にある朴訥(ぼくとつ)な少年—上小川村で育った少し悲し気で優しい少年のまなざしを忘れてはなるまい。だから私は、心平さんが常に歌っていた大好きなあの「天」に行ったとは思わない。むしろ心平さんは自ら生んだ分身…あの無数の蛙たちと共に土にいて、やはりあの天を仰ぎ、見つめつづけているように思う。その東北の自然はあさはかに現代化されたそれではなく、「ひるまはげんげと藤のむらさき。／夜は梟(ふくろう)のほろすけほう。」…あの古い昔ながらの大字(あざ)上小川、たえずまぶしい雲の流れる、「永遠」と呼ぶにふさわしい沈黙の土地であるにちがいない。

山本太郎さん追悼

山本太郎君のこと

富士川英郎

昭和十九年か、二十年のはじめのことであったと思う。当時、私は旧制の佐賀高等学校でドイツ語の教師をしていたが、或る日、その広い教官室へひとりの背の高い学生が入ってきた。別に見るともなく見ていると、その学生は彼を呼びだした或る教官に向って、直立不動の姿勢で立って、「これからはあんな非常識なことはしませんから…」と言って謝った。あとでその学生が山本鼎の息子で、北原白秋の甥であると聞いたが、これが山本太郎君を私が見た最初の機会であった。

敗戦の直後、私は山本君のいたクラスにドイツ語を教えたが、教科書がなかなか手に入らない状態だったので、デーメルやゲオルゲやリルケなどの詩を、自分で原紙を截って、謄写版で刷ったのを配って、それをみんなで一緒に読んだ。山本君はいつもはあまり出席の良い学生ではなかったが、この講義の時間にはかなりよく出席していたようである。いちどなど、その講義が終ったとき、山本君が教壇にいた私に近よってきて、「ドイツの詩はいいですね、僕はデーメルが好きです」と言ったことがあった。

敗戦後まもなくして佐高で記念祭が催されたとき、山本君は山路基君とふたりで、無言劇(パントマイム)と称して、なんだかわけのわからぬ踊りを講堂で踊り、それが街の女学生たちの間で評判になったりしたこともあったが、このようにして山本君は、すでに佐高生であった頃から、ずぼらではあったが、特殊な才能を持ち、風変りで、個性の強い存在として、一頭地を抜いていたのであった。

尾崎さんと白菅会

川崎精雄

尾崎さんに私がはじめてお会いしたのは、昭和九年の山小屋倶楽部第一回の会合の席で、このことは『アルプ』一九六号「特集尾崎喜八」（昭和四十九年六月）に書かせて頂いた。その会が会員過剰で騒々しくなったので、尾崎さんはじめ、十三、四人の人々が別の会を作り、静かな山歩るきをしようということになり、私は知らない間に会員の一人に加えられていた。昭和十一年のことである。その時のメンバー内田豊太郎、荒井道太郎、瀬名貞利、田村栄、高田不二、山本しず子の諸氏はすでに物故し、今連絡がとれているのは、佐々木隆、青山慶二、川崎の三人だけである。日本橋の東急、その頃の白木屋の裏に東橋庵という蕎麦屋があって、そこの二階を会合に使った。会の名は、尾崎さんの発案で、万葉集の歌から採った〝白菅会〟ときまった。

万葉集には「いざ児ども大和へ早くしらすげの　真野の榛原手折りて行かむ（高市連黒人）、「白菅の真野の榛原往くさ来さ　君こそ見らめ真野のはりはら（黒人の妻）その他白菅の歌がある。いかにも尾崎さんの選出らしい、そしてこの会にぴったりの命名であった。

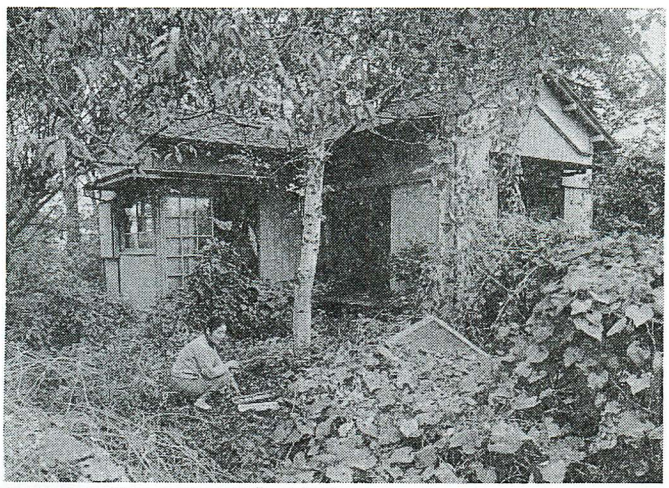
尾崎さんが最年長であったか否か知らないが、どうしても尾崎さんが中心で、良い話をして下さった。しぜんに誰からともなく、尾崎先生、と呼びはじめていた。私は、先生などと分け隔てした呼び方は嫌であった。尾崎さんも、先生と呼ばれる毎に嫌な顔をされた。ところが、その私が他の人たちの言葉に釣りこまれて、思わず、尾崎先生、と言ってしまったことがある。失敗った、と思ったが遅かった。尾崎さんから「先生はよし給え」と一喝された。

山行は中央線沿線や箱根などが多く、尾崎さんはいつも軽快な身ごなしで歩るかれ、草花などの説明をして下さった。が、頭の悪い私は一つも覚えようとしなかった。そんな山行には栄子さんも同行された。八王子近くの峠歩るきだったと思う。ちょうど太陽が丹沢の連嶺へかかる頃、尾崎さんと栄子さんの重唱が実に素晴らしかった。

会報も出し度かったが、人数が少いし皆が忙しい時代になったので、思い思いのことを書いた原稿を綴じてたらい廻しにした。それも戦争が激しくなったため、立ち消えになってしまった。よい会だったから残念である。

（編集部からのお知らせ）

十二月の半ばに、新たに『尾崎喜八の詩を使った大島亮吉の一文』のコピーを頂戴いたしました。この随想は「山と溪谷」八九年二月号に掲載されるもので、喜八の詩集『高層雲の下』中「野の搾乳場」が大島亮吉によって無断で使用され、別の散文作品として発表されたことをめぐって、生前の喜八の貴重な発言、両者の文章の比較などがなされています。川崎氏のお手紙では、当誌への再録も可能とのことですので、その資料としての重要性を鑑みて、次号にて掲載させて戴きます。残念ながら本号ではお知らせするのが精一杯ですのでご了承下さい。



上野毛時代の尾崎家。左端が書斎（p. 7 参照）

尾崎喜八記念館（仮称）設立に寄せて

中山政市

過年より懸案となっていました尾崎喜八記念館（仮称）の設立が、町当局の御理解を得て、その途についたことが嬉しく思われます。町の教育委員会・公民館委員等の肝煎りでやっと呱々の声を揚げることができ、在京の尾崎先生ゆかりの諸先生の御助言を戴き、富士見尾崎会の諸君もそれなりに衿を正して実現までの諸準備に鋭意着手するわけでありますが、展示場の整備・演出・管理・経費等々について幾多の構想・研究があり、これから一つ一つ解決していかなければならない問題が到来するものと覚悟しております。優秀な記念館のオープンが出来る日を楽しみにしながらその間諸先生の御指導御協力を得まして、私共も努力しなければならないと肝に銘じている次第であります。

尾崎先生は〃山の詩人〃とよく言われていますが、そんな小範囲のものではありません。博物的視野に立って、自然と、それをとりまく人間愛との合唱の詩人であり、その詩は表象的にも心象的にもリズミカルな音楽であります。そしてその源泉は自然を深く観察し科学するところにありました。

敗戦直後の分水荘に居られました先生のお伴をして野原や林を抜けたことが幾度となく私はありました。食糧難の時期で人々は食生活に追われていたのです。国は敗れましたが四季の自然は違いなく巡り、そこには敗戦の姿はありませんでした。

私は当時―今から四十年前―まだ青年でした。自然を顧みるなど無頓着で、恐る恐る、先生のお伴をしました。まず先生は草花の名を第一に教えてくれました。そして野外植物の小図鑑を私に持たせ一つ一つの名前を教えてくれるのです。そんなことが私の空白の心情の内を強く敲いて、それからは暇をみては野や林や湿地や小川のほとりを、一つ一つの草花を見つけては図鑑と照合する日々が続きました。

春の芝生に埋れて小人（こびと）のようでもあるが、根をがっちりと張って太陽の光と握手しているうす紫の〃ふでりんどう〃気をつけないと踏んでしまう。貴婦人の装ひをした〃エビネ〃、豪華な首飾を思わせる〃九輪草〃、つゝましやかな〃ひとりしずか〃、どこまでも純白を誇る〃梅鉢草〃、あるときは、小川のほとりに小さな川音を聞きながら自己満足の音楽を楽しんでいる〃野ばら〃。数えきれない草花が―それは今迄何の気なしに花が咲いているだけという見すごしであったのが―宝石のように見えてくるのです。時にまた、図鑑で探すことのできなかった花を見つけて、先生にその花の名を教えていただく、〃もじずり〃だと言われる、万葉人を想わせるような気持になりました。

小鳥や昆虫の生活も話して下さいました。地元の人たちさえ見も知らず関心のなかった貴重な蝶の卵をみつけて羽化させた話など、分水荘の森をとりまく博物の話に切りがありませんでした。

夜中にふと目を醒ますと勝手の水道の蛇口から水滴の音を聞くことがあります。ポトン、ポトン、と等間隔でリズムをつくっている。受ける器の材質と大きさと水量によってもその音質とテンポは変ってくるでしょう。

澄み切った冷徹な音は深夜のそれであります。蛇口を増したり、水滴の間隔と受け器をかえたり工夫調節したら、われながらほくそ笑む音楽ともなるでしょう。

生活の音も山の音も水の音も鳥の声も昆虫の羽音も、すべての大地の音が名曲を生んでおります。

富士見高原の広葉樹林の落葉は十一月に入ると急にあわたゞしくなります。落下してくる枯葉を見るのも楽しいものです。おだやかな秋日和ですとそれは円舞曲を想わせ、空気の動きが激しくなるにつれそれは狂想曲にもなります。唐松林のそれは剣針のよう、斜(なな)めに落ちて行進曲にもなります。

すべての音は自然の私たちへの音楽の贈物であります。

先生の詩の終りは余韻を残して音楽の世界へと私たちを誘ってくれるのです。

八ヶ岳の山容は先生の滞在後の四十年の歳月を経ても変ってはいないでしょう。

八ヶ岳を包み又過ぎて行く雲の姿や色彩は、四季によって大まかに区分することができるでしょう。十一月の今日、山脈は降雪をいただき、午前十時の斜光は阿弥陀の横顔に白黒の岩襞を明確に反射して、昔変らぬ偉容を見せております。一月、二月と厳冬になると夕映えは嶺々を真赤に彩って、やがて麓の方から紫色に沈んで夕(ゆうべ)が来ると間もなく美しい冬の夜空になります。あの星。この星。

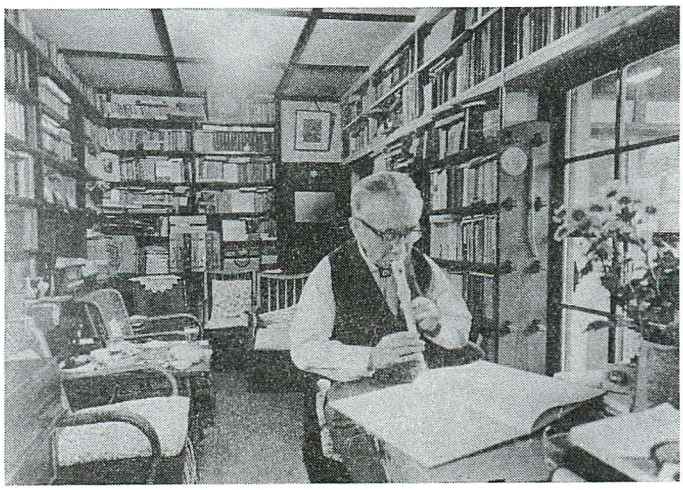
先生は分水荘で冬の夜空を見上げながら、しばし宇宙を遊泳したことでしょう。

このすばらしい自然、私たちの生命の営みも、心情的な反射も、人間のすべてをふくんだ環境を育んでくれる自然、この自然が無償の贈物であることはこの上ない感謝でなければなりません。このあたりまえのように見過してきた自然をあらためて観察し探究しそれに感謝する心。

尾崎記念館もこのような役を担って啓蒙のお役に立てたら、という私の念願であります。尾崎先生のこのような遺産は、接する者にとって詩への憧憬と博物の探求へと漸進する向学の念を引き起こさせるものであります。

以上拙文をもって終らせていただきますが、御笑読の諸先生もあることは承知で、――尾崎先生の私への御薫陶、過去四十年の以前からいくらかでも私の関心を変えたのがこの拙文になったのだと御容赦願えれば幸です。今日十一月十五日、今夜も冷え込んでおります。日中の北風が雲を払って夜空は美しいことでしょう。

尾崎喜八記念館完成の展示室の模様など想像しながら筆をおきます。



この書斎は富士見の記念館内に復原される予定。

＊資料＊

自然についてのエッセイ

――戦前のものを中心に――

自然の中

朝

私の小屋の左手の高い松林をこえて、もう夏の朝日が仕事場の窓をまつかに染めてゐる。武蔵野はけふもすばらしい晴天だ。まばゆいやうな森や畑の風景の上で、まつさをな光る空に、旱の雲が気まゝな一掃毛をなすつてゐる。まだ露の乾ききらない花壇は、この土用の暑さにすこし乱れて、季節の花が十種ばかり咲き放題に咲いてゐる。

私の毎朝の仕事は、妻が私の書斎と自分の居間とを掃除してゐる間に、江渡狄嶺さんの家の井戸へ大バケツ二杯の水を汲みにゆく事と、外へ持ち出した七輪へ炭火を起こす事とである。

私はズボン一つの素裸で、バケツを、ぶらさげて出かける。抜けてゆく桜の林は薄みどりの光が海底のやうだ。すがすがしい朝風が下草の葉を動かしてゐる。むかふの林で駒鳥がオーボイのやうな円い、朗らかな声で鳴いてゐる。静かなうちに楽しい賑かさの満ちた田舎の夏の朝だ。私の心も軽い。私は今朝書かうと思ふ詩の文句を考へながら、運動靴のゴム裏でしつとりした木下路を踏んでゆく。

「ざきをぢさあん！」

此の世の朝、最初に私を呼ぶ声がする！

江渡さんの愛すべき小娘と息子、九つになる従子ちやんと七つになる進ちやんとが林の日かげで何かして遊んでゐる。

「おゝい、何してゐるの。」

「何もしてねえ」と振分髪の従子ちやんが卒直に云ふ。特殊にそれと語るべき遊びをしてゐない時、この娘の常にする返事である。

「ふむ」私は小径を行きすぎようとする。すると今度声をかけるのは進ちやんである。

「ざきをぢさん。今日ばんぎ(夕刻のこと)にきつと来るんだぜ。ちんのお家でまゝ食ふんだぜ」ちんとは進のなまりで、進ちやん自身の事だ。

「実子姉さんも一緒にな」と従子ちやんが附け足す。実子姉さんとは私の妻の事である。

「うむ。」

「腹へらして来るんだぜ。昼間東京へ往つても、何も食つて来ちやいけねえぜ。」

「あゝ、うんと腹へらして来て、ちんのお家で御馳走にならあ、ね。」

「ざきをぢさん今日東京の母ちやんのお家へいく？」

「いかない。本郷の本屋さんへ原稿とゞけて、帰りにちん達に花火を買つて急いで帰つて来るよ。」

「うん」進ちやんは我が意を得たやうに合点をする。

「さうして花火やるんだなあ、ちん」と、従子ちやんが、今夜を楽しさうに空想する。ちんも味噌歯を出して、嬉しさうに破顔一笑する。

「乱れ玉や蛇花火なんかなあ。ざきをぢさん、いつぱい買つて来るんだぜ。」

「うむ。」

「パヽの一円と、ざきをぢさんの一円とな。」

二人の無邪気の子供は二三日前からの約束を口を揃へてコンファームする。

「ばんぎが待ちどほしいな、ちん。」

「うん、待ちどほしいなあ。」

私はこの田舎の天使のやうな二人の子供と別れて江渡さんの裏口の井戸へゆく。長女の不二ちやんと祖母さんとが台所で朝飯の用意をしてゐる。

「子供らが今夜あなた方のゐらつしやるのを楽しみにしてゐましてなあ。ほんに皆ざきをぢさんが好きで大変でござんすよ。」

「はあ。」

私はポンプを押しながら祖母さんの言葉を音楽のやうに聴いてゐる。涼しさうに明け放した台所を見とほして、中庭へむかつた向ふの座敷で、これも同じ裸の江渡さんがもう原

稿を書いてゐる。台所の蜻蛉口を越えて、働き者の与里さんが、いつもの束ね髪にもんぺいを穿いたいでたちで鶏小屋の鶏共に朝の餌を分けて歩いてゐる。肥料桶をぎちぎち担つて英男さんが通るのが見える。下高井戸から米糠を買つて自転車で帰つて来た少年繁治さんの汗まみれな顔が見える。をばさん（江渡さんの奥さん）は、まだ病気の復ちやんが眼を覚まさないと見えて出て来ない。

私の眼にうつるものは、すべてこれ平和な夏の朝の牧歌的光景である。

今日は江渡さんの惣領息子、死んだ十ちやんの忌日である。今夜その供養の食事が私達に振舞はれる、牛込の両親の家へは立寄らずに、原稿をとゞけて花火を買つて早く帰つて来よう。

私は重いバケツを両手にさげて木下路を帰る、子供達はまだあすこで何かしてゐる。

「ざきをちさん、きつとだぜ。」

「あゝ、早く帰つて来るよ、花火を買つてね。」

「うん。」

美しい朝だ。私の小屋の窓硝子は太陽にぴかぴか輝いてゐる。野天の七輪では金網の上で焼結飯が好い匂にこげてゐる。

「重もたかつたでしよ」と、台所の入口で妻が云ふ。

「なあに」私は此頃だんだん太くなつて来た腕をさすりながら、力瘤を出して見せる。烈しい日光の中を涼しい風が吹きぬける。秋が遠くに見えて来た感じがする。善い生活と仕事の秋！

私は妻の差出す歯磨きと楊子を受けとつて、裏のコスモスの藪へ、花が幾つ開いたか見にゆく。

草とり

毎日の旱、毎日の来客、次から次へ書きたい原稿、書かなければならない原稿。生活は多忙で、生活は苦しい。読書も散歩も思ふやうには出来ない七月を、雑草ばかりは私の畑で思ふがまゝに繁つてしまつた。

「草をとらなくつては。」これが私達夫婦の、口に出さない時でも気に病んでゐる仕事であつた。

或朝、出入りの酒屋が来て、一寸した拍子に「お宅の畑も大分草が生えましたね、早く抜かないと実を結びますよ」と云つた。私達はびくんとした。

「今日は何を止めても草とりをしやう」その朝の食事の時私は妻に云つた。

「だつてあなたは仕事があるんでしよ。私一人でやりますから、あなたはお書きなさいよ。」

「駄目だよ。そんな事してたら大変だ。もうよそでは大抵とつてしまつた。家の畑ばかりだ、生えつぱなしなのは」私達は飯を食ふと直ぐ仕度をした。

頭のいゝ朝、書きたい詩の一つ二つは有る朝、また妻にとつては洗濯物のたまつてゐる朝。その朝を犠牲にするのも生活だ。

「梨の木を接げよ、ダフニス。

汝の孫らその実を食はん」である。

夫婦の者は次第に暑熱の昇つてゆく炎天の畑で、受持の場所をきめて草抜きにとりかゝる。土中深く張りまはした雑草の根、薩摩薯の蔓にからんでゐるかなむぐらの蔓。忽ち吸ひつくぶよ。直ぐにふくれる腕や足、帽子の下からたらたら流れる汗。泥ぼつけの手、仕事は苦しい。その苦しさを忘れるためには夢中になるより仕方がない。

「おい。ずゐぶん生えたなあ。」

「えゝ、こつちも大変よ。だけど早く片付けてしまはなくてはね。」

「うん。」

抜いた部分を振り返つて見ると、まだ案外はかどつてゐない。行手は目にあまる草また草。

「厭になるなあ。」

「なんです、ぶよ？」

「うゝん、草が多くつてさ。」

「えゝ、早く一寸の暇を見て少しでも抜いておけばよござんしたのにね。でも一生懸命にやつてる内には、いつの間にか片付いてしまひますよ。それよりぶよがね。これにや閉口よ。」

「うん、俺もずゐぶん食はれた。」

「あたしもう七ケ所よ。あら、又！　ほんとにしつつこい人ね。」

妻は人間に物を云ふやうに、真白な脛に吸付くぶよを泥だらけの手の平で叩きつぶしてゐる。

それから再び沈黙の時がつゞく。私はいつの間にか、今ごろはどこかの山の温泉地で、

閑古鳥の鳴く深い森の中を歩いてゐる友の事を考へる。Tはそこから葉書を呉れた。此の夏は詩集一冊ぐらゐの詩を書くつもりだと彼は書いてよこした。また房州の海岸へ行つてゐるSの事を考へる。彼も亦或る研究を書いてゐる。それがずんずんはかどつてゐるさうだ。それから自然の聯想で、夏の時の孤独な心持を書いた、あの作曲家ベルリオの美しくも悩ましい叙述を思ひ出す。

「心が静穏な時でさへ、夏の日曜に私はこの寂しさを少しは感じる。吾々の都会(巴里)に生気がなくなり、そして人々が皆田舎へ行つてしまつた夏の日曜にである。なぜならば、私は人々が自分から遠ざかつて楽しんでゐる事を知つてゐるし、彼等の不在を感じるからである。ベートーフエンの交響楽のアダヂオ、グルツクの「アルセスト」や「アルミード」の或場面、彼の伊太利式歌劇「テレマツコオ」の或る歌、彼の「オルフエオ」の中の極楽の野。これらはすべて私のこの悩ましさに幾分悪い打撃を与へる。しかし之等の傑作は、同時に一箇の解毒剤でもある。——人の涙を流させ、次いではその苦悩が癒やされるからである。」

草を抜きつゝ、様々な思ひに漂蕩しつゝ、私の心がだんだん暗くなる。私は眼を上げて向ふの畦で懸命に働いてゐる妻を見る。愚痴一つこぼす事のない、明るく健気なその心を感じる。そして、「やがて私もあの苦しみの時代のジャン・クリストフと一緒に、同じベルリオの言葉で自ら慰めるのだ。」

「生活の困苦を超えて立上らうではないか。そしてあの名高い「怒りの日」の愉快な繰返しを、軽やかな声で歌はうではないか。」夢中であれ！ 夢中である事は精神の戸口に弱さを入れぬ事だ。また邪念の生長を防ぐことだ。突進せよ、汝の目標に向つて、卒直に、誠実に、真剣に、不惑に、この生活を生きるより道がない。

「あゝ、やつと畦五本。でもだんだん綺麗になつてゆくから楽しみですわ。」

私の夢想を破つて、妻の元気のいゝ声が向ふでした。さうだ。日は未だ午前だ。時間は有りあまつてゐる。今日は一日をこの仕事にコンサクレしても惜しくはないと私は思つた。腕も足もぶよの傷口だらけ。しかし労働の空気は次第に完全に、私を魅了して往つた。

（「雄弁」大正十三年九月号）

武蔵野に光る秋

…自由を歌ふ十月の微風…

あの九月の暴風雨に荒々しくさいなまれて、今年の秋は武蔵野の濶葉樹が例年よりも幾らか汚いやうだ。殊に今日のやうな麗かな日和には、時に先立つてむりやりに葉をもぎ取られた木々の姿が、羽替時の鳥のやうにみすぼらしく見える。残つた葉も手にとつて子細に見れば、一枚一枚が皆傷つき痛んで、穴のあいたのや、縁の裂けたのや、半分にちぎれてしまつたのや、薄い肉を削られて網脈の骨が露出したのや、兎に角満足な形をしてゐるのはひとつも無い。澄みわたつた青空の下、彼等はこの十月の金色の日光を浴びて、不具のまゝに癒えて行く負傷兵のやうに、美しい逆説的な自然の中でその余生を享けてゐる。

＊

毎年十月初めになると田舎の路傍や畑の土の上で、あの華麗な翼を拡げたり畳んだりしてゐるアカタテハ、ヒメタテハ、ルリタテハのやうな蝶類も今年はすくない。彼等も亦蛹の時にあの暴風雨に見舞はれて圧潰されたり、腐つたりたまたま羽化した者も吹飛ばされ叩きつけられ、寒さと飢餓とに斃れてしまつたのだらう。たまたま生残つた者を見かける事はあるがいづれも乞食のやうにぼろぼろで見る影もない。

しかし、それにしても何といふ麗かな今日の秋晴だらう。額にあたる日光の頼もしいやうな暖かさ敬虔な日陰の暗さ、路の上で自由を歌ふすがすがしい十月の微風、をちこちで生活がどよめかす物の響や人の声、それにまじつて、絶えず何処か知らから聴こえて来る小鳥の囀り。「自然論」のエマースンでなくても、まつたくこんな日は一年のうちに指折り数へる程しか無い。

＊

小さい望遠鏡をふところにして外へ出る。もう鳥の渡りがはじまつてゐるので、こゝ暫らくは散歩の時これが手放せないのである。真赤な蜻蛉アキアカネが無数に流れてゐる往来を出はづれて畠へかゝると、頭の上の高いところでピイ、ピイといふ声がする。綺麗に

澄んだ青空を飛ぶ鴨の声である。望遠鏡で追掛けながら数へると二十羽ばかりの一群で、北から南へあの波打つやうな飛び方で急いで行く。又しばらくすると別の一群今度は七羽。私は袂から手帖を取出して、種類と数と日附と時刻と併せてその飛翔の方向とを書きつける。彼等の中の或る者は冬ぢう居残つて、寒い朝々、一時間ばかり囀りつゞけるのが毎年の例である。

百舌鳥があちこちで高音を切つてゐる事はいふまでもない。彼等は樹木の葉の冠や刺のやうな枝を踏まへて、あの威嚇的なキー、キーを田園の空へ響かせる。夏の間その存在を忘られてゐた彼等はこれから冬へかけての武蔵野のロバート・バーンスである。殊に西の空が寒い夕映に彩られる十二月の日の暮方、その鋭い叫びは北西の風にまじつて、遙に東天のオリオンを呼び上げる。

＊

路傍の草の中で今最も多く鳴いてゐる虫はクサヒバリである。コホロギやカネタヽキは田舎でも寧ろ人家の周囲に多い。畑のへりなどに抜き捨てゝ積み上げた枯草の山は、彼等クサヒバリの最も喜ぶかくれがになつてゐる。

溝のふちはイヌタデ―俗称アカノマンマのパステル紅で彩られる。それにまじつて微かな桃色の花をつゞるもう終りに近いキツネノマゴ、又菊科のヤクシサウやアキノノゲシの黄が目立ちはしないが素朴に美しい。タケニグサはこの間の嵐に悉くやられて、今ではニスをぬつたやうな枯れた茎だけが林立してゐる。

スヽキは到るところ。そして武蔵野ではやはりその遠景に見える風情がいゝ。今私の立つてゐる場所からだと、ところどころに一むらづゝ茂つてゐる彼等を前景にして、大菩薩連嶺や御前山、大嶽山の薄青い山脈が夢のやうに地平の空をかぎつてゐる。葦は湿地に多い。スヽキ程優美ではないが、乱れ雲の空を背景に、うそ寒い風のわたる午後、彼等の蓬々とそゝけた穂の立騒ぐ眺めには又別種の趣きがある。夏の間その中にゐたオホヨシキリやヒクヒナは、今ではもう声も聴かせず姿も見せない。

（「帝国大学新聞」昭和九年十月二十二日）

窓を叩く鳥

親しい友よ。

二月十七日の御宅での座談会に、わざわざ堀口君をお使でお招きにあづかつたが、丁度いづこも同じ日曜日の事で、うちでも朝から引続いて来客があつたものだから、楽みにしてゐながらとうとう参上する事の出来なかつたのは残念です。

実は其日伺つたらばお話して、お出掛けの由の内田先生や君から、御意見を拝聴したいと思つてゐる事があつたのです。それは二月号の「野鳥」で高知の西谷さんといふ方の書いて居られた、あの「キセキレイの叩く音」と、それに類似の現象についてでした。それに高知市小高坂といへば、心になつかしく響くものがあるのです。私は五年ばかり前の夏の最も盛んな季節を、御存知の片山君の家で暮して、追手筋や小高坂あたりを、土佐の国のあの異常に美しい朝な夕なに、よく散歩したものでした。室戸崎の灯台下、太平洋の波の砕ける巌頭で、沢山のイソヒヨドリを見て時の中に取入れたのも其の滞在の折の思ひ出です。

さて、キセキレイが窓を叩きに来るといふ一寸淡ましくなるやうな消息に就てですが、一体何のために小鳥が人間の家の窓を叩くのだか其理由を知りたいのはひとり西谷さんやシイ・エイ・ジョーンス氏や、またドオセット州の奥様だけではありますまい。花と云はず鳥と云はず、すべての幼い者にサンパティーに薫る理解を持ちたいと願ふ吾々も、また確かに其の一人です。私はあの文章を拝見して、英吉利の簡易な植物志「フラワアズ・オブ・ザ・フイールド」を編纂したシイ・エイ・ジョーンスの名から、よく動植物の本を書いてゐるエドワアド・ステップの名を聯想し、さうして直ぐに、そのステップが何だかの本で窓を叩きに来る小鳥の事を述べてゐたのを思ひ出して、自分の至つて貧しくはあるが自然科学の書物だけを並べた書棚を漁りながら、やつと其れを見つけ出したのでした。本は「ネイチャ・イン・ザ・ガアドウン」といふ二冊物の小さなポケット本ですが、其中に、簡約すればざつとこんな事が書いてあるのです。

五月の或快晴の朝五時頃、ステップの家族は、誰かゞ杖か何かで烈しく樫の塀を叩いてゐるやうな音で眼をさました。そこで起きて行つて家のまわりを見廻つたが誰もゐない。あたりの野にもそれらしい人影がない。其日はそれで済んだ。中一日置いて又同じやうな事が起つた。依然として何者の仕業だか分らなかつたところが五日目の朝になつて、やつと妻君が其の怪しい者の正体を突きとめた。それは「一羽の大きな黒い鳥で、それが翼をすつかり拡げて、窓枠に縋りつきながら、胸と嘴とで窓硝子を叩いてゐる」のであつた。

翌朝はステップ自身が見た。大きな黒い鳥といふのは黒歌鳥の雄で、羽根をふくらませて古い蔓薔薇の枝にとまり、枝葉の茂みの間から窓の方へ頭を突込んでゐるのであつた。さうして続く翌る朝には黒歌鳥だけでは無かつた。彼のそばには、頭蒼鷺（づあをあとり）の雄も控へてゐた。ビンビン響く音と云ひ、窓硝子に残された嘴の痕と云ひ、彼等が叩いた事は疑ふ余地が無かつた。

さうしてステップ君の結論は斯うです。黒歌鳥と雖も、何もこんな馬鹿な無駄事を好きこのんでやつてゐるわけではない。針樅の木の中には多勢の雛が父親の運んで来る食餌を待ちこがれてゐる。彼は忙しい。それでお父さんは薔薇の葉を食つてゐる細そりした緑色の芋虫を集めに来たのである。ところが午前五時と云へば、ほのぼの明けた空の光が、丁度蔓薔薇のうしろの窓を染めて、硝子がうまい具合に姿見の役を演じてゐる。黒歌鳥の父親は其の姿見に映つたおのが姿を硝子の向側の別の相手だと思つて、此の闖入者、此の邪魔者に挑戦する。又頭蒼鷺はどうかと云へば、彼は近くの家庭にゐる自分の妻君や子供達を驚かして大きな物音を立てる此の黒歌鳥に抗議を申込みに来たのだが、これも亦鏡に映る自分の姿を敵と思ひ込んで、同じやうに戦を挑んだのである、と云ふのです。

そこで事態を「シリアスなり」と見て取つた我がブリテイッシュ動植物界の説話者エドワアド・ステップ君は、硝子の反射能力を殺ぐために裏側の方から色々の工作を試みた。しかし結果は何れも面白くない。（何故彼が硝子の前に板なり布なりを張つて見る気にならなかつたか、それが私には分らない）そこで遂に意を決して、鳥達の姿見の前の棲まり木をなしてゐる蔓薔薇を刈つてしまつた。其れ以来、もう二度と斯ういふトラブルは無くなつた。

中西君、私としては自分にこんな面白い経験が恵まれないので何にも云ふ資格はありませんが、西谷さん、ジョーンス氏及びドオセットの一婦人の場合も、或は同じやうな種類の事柄では無いでせうか。

最後に、昨日の朝今云つた本を読み返してから、私は自分の飼鳥について鏡でためして見たらば、頬白は鏡に映る自分の姿を見ると例の「ピチピチ、ピチピチ」といふ鋭い怒つた声を出しながら虚像に向けて突掛り、鶯（うぐひす）はあの爪切鋏のやうな嘴をあけて「ギャー、ギャー」と威嚇してゐました。寔に蓄音機で交響楽を論ずる程の事ですが、敬虔な一初学者の差出す鳥類心理学への一素材として取上げて下されば幸です。

（「野鳥」昭和十年四月号）

五月のメドレイ

去年の十二月二十三日には、其日以後「畳の目ほど伸びてゆく」昼間のために、私たちは毎年の行事としてゐる太陽の祭をした。食卓の大皿の上では鵝と香味料とを詰物にしたカボチャが、食欲をそゝる温かい湯気を上げてゐた。落葉を狩り立てゝ戸外に騒ぐ冬の季節風も何のその、初生りを採つて貯へて置いたそのカボチャは、晴れやかに暑い夏の田舎のひろがりを思い出させるに充分だつた。其のふつくり蒸れた瓠果にナイフを入れゝば、待ちかねた子供は手を拍つて喜び、成功した料理のために妻は安堵の色をうかべ、秘められた夏の光輝はそこら一面に花咲いた。きらきら光る葡萄酒は、ポアトゥー、サントンジュ、ガスコーニュと、仏蘭西の南西諸州にひろがる広大な葡萄畠の丘陵や、熱い石炭岩地に陰顕する羅馬時代の廃趾や、ドルメンを囲む森松の林や、そこに照る盛夏初秋の深遠な日光や、潮風かほるアルカッションの浜辺や、さては大西洋の空の色や水の広袤を想させるのだつた。私たちは銀紙をむきながら、一きれのチイスに瑞西の牧場を思つた。また引裂くパンには、七月の野に波うつブロンドの麦

の穂を見、そこに響くとりいれの鎌の音を聴いた。最後にすゝる珈琲は太陽の巣であるアラビアからの物だつた。私は酔つてシューマンの「ゾンネンシャイン」を歌ひ、ゲーテの西東詩集の一篇を読んだ。子供も浮かれて仏蘭西の童謡「蜻蛉」をグラチオーゾに歌ひ、「葡萄のとりいれ」を「生気をもつて快活に」歌つた。妻は残り物を自分の口で整理し、夫と子供との上機嫌な歌を傾聴し、幸福な牝鶏のやうに膨れて満足してゐた。そしてこれが、其の為に私たちが普段から幾らかの用意をして置いた冬至の太陽祭の饗宴である。

其時からすでに四ケ月余りが経過して今は五月。昼間は四時間以上も伸びて、南中する太陽は子午線を七十三度なにがしまで昇つてゐる。そして今度は私たちの方で太陽から祝はれる時が来たのである。

太陽よ！　五月に君は何を持つて来た？

俺は先づあまねき光と、快適な気温と、あをあをした南東の風とを持つて来た。それから豊富な雲で絢爛な青空を持つて来た。さういふ事のためには、俺は大陸の北や南の大きな揺籃で高気圧と低気圧とを育てゝしかも彼等があまり成長しない内に順々に東の方へ旅立たせたり、又手をのばして遠く太平洋の水を冷やしたりするのだ。

かういふ季節の先触れとして、俺は先づ燕の使節を送つた筈だ。それに続いて後から後から、いろいろな鳥共が現れたに違ない。彼等を食はせるには虫が居なくてはならない。だから俺は冬眠の虫共を追出して産卵させたり変態させたりする。しかし又其の虫共も餓えさせてはならないから、俺は草木の芽を綻ばせ、柔かい枝や茎を伸ばさせ、こんもりした新緑をしたゝらせ、色も形もさまざまな花を咲かせるのだ。しかし斯うした彼等が互に食はうが食はれやうが、それは彼等自身の事で俺のかゝはつた事ではない。俺の願は彼等一切の生物が其の運命を生き抜く事だ。俺の持つて来たのは生だ。歓ばしい生、奮闘に価する生、悔いる事の無い生だ。あゝ、俺の創造する此事業にあづかつて、酔へるが者のやうに生きる者達こそ祝はれるがいい！……

それで今や五月の天地に日光は燦としてあまねく、海からの南風は遠く都会の空にアドバルーンを傾かせこゝ田園の広がりに涼しい麦の穂波を走らせ、あらゆる樹々の新緑をさわさわと鳴らしてゐる。

田舎の夜明け、空は露でも滴つて来るかとばかり柔かく青い。屋根のまはりでは雛を育てゝゐる雀の夫婦が幾組も、一年中で最も水々しい声を張上げて話をしてゐる。昨夜晩くオホコノハヅクが甘やかに鳴いてゐた森の松の木の天辺では、今朝は尾長の群が「ゲーイ・ゲーイ」と鳴きながら、その美しい空色の尾を揺すつたり飛廻つたりしてゐる。南方の越冬地から中部の山岳地方へ帰る途すがら、昨日此林へ立寄つて一夜を明かしたらしい黄ビタキが、背中と喉を鮮黄色に彩つた黒装束で、真似も出来ないやうなメロディーを其の豊麗な笛で吹き鳴らしてゐる。同時に林の中は金蘭と銀蘭との花盛りの時である。木立の中を歩いて行くとこれから段々多くなる蛾の先駆が飛出して草の中や幹の間へ身をかくす。

中央を用水の小川が流れてゐる水湿地へ出ると、一帯の葦原はオホヨシキリの「ギョギョシ・ギョギョシ」の歌で満たされてゐる。彼等はもう一週間ばかり前から此処へ到著して営巣に都合のいゝくらゐ葦の伸びるのを待ちながら終日歌ひ暮らしてゐるのである。四尺ばかりに伸びた其の葦の中では、しかし既にヒクヒナが巣を初めたらしく、あの小刻みに刻みながら次第に絶え入るやうに消えてゆく寂しい美しい歌を歌つてゐる。

向うの丘から「キョロリ・キョロリ・キョロリ・キョロリン」と、豊かな、つやのある木管楽器の音が響くのは鶫である。冬中居残つた彼等はもうぢき北の国へ帰るために別れの歌を聴かせてゐるのであらう。見上げる空中を「ヒリヒリン・ヒリヒリン」を鳴きながら飛んで行くのは今欅の木の股に営巣の最中のサンシャウクヒである。

やがて太陽が出て水辺の霧を払ふ。するとギンヤンマ、シホカラトンボ、ヨツボシトンボ、カハトンボの群が最初の陽光を浴びて飛び初める。蛙が鳴く。巣の敷物にとて鴉がツバナを摘みに来る。そして農家の子供がこつそり他人に気づかれないやうにビンドウを沈めに来るのも此時間である。そして又遙か向うの私の家で朝日を浴びた窓が金色の花のやうになるのも此時間である。

（日本山岳会「会報」昭和十一年五月）

早春の山郷

早春といへば東京附近ならば先づ春分をまんなかにして、二十四気の所謂啓蟄（陽暦三月六日頃）から清明（四月五日頃）あたり迄の一ケ月ぐらゐを指すのではないだらうか。其頃になると、山ノ手の町の物静かな往来を歩いてゐながら不図何処からともなく漂つて来る沈丁花の香に足をとめたり、生垣から覗いてゐる白木蓮や連翹の花の上にうつとりと和やかな空を仰いだりする事が多い。田舎では畠の麦が急に伸びはじめ、猫柳や行李柳の花穂が銀の裳をぬぎ、薄紫にかすむ雑木林の縁ではたんぽゝや菫にまじつて草木瓜が鮮かな朱の花をひらき、そよ吹く春風の奥に雲雀の歌が流れてゐる。

しかし同じ東京附近でも、関東山地だとか、丹沢、道志、御坂などの山間になると、春の動きも幾分遅れるやうである。早い話が東京の郊外で土筆がしなび、桜が褪せ、ぽかぽかに乾いた畠の隅で小さな旋風が埃を巻くやうな春も稍老いた頃に秩父あたりの山奥へ行くと、其処は未だ冬の領分で僅かに日溜りの部落に咲く野梅の花や、峠の藪かげで発見する二三輪の節分草や、山間の青空に浮ぶ柔かな雲の輪廓に、どうやら春近しと云つた感慨を抱くやうな工合である。

私のやうにスキーも未だ一二回の駆出しでおまけに其の練習にも向きになれずに冬ぢう燻つてゐるやうな人間にとつては、此の早春の山地くらゐ牽引力の強いものも無ければ、山地の春の消息くらゐ待遠しいものも無い。残雪の山の中腹から長閑に上がる炭焼の煙、溪谷に響くみそさゞいや河烏の澄んだ囀鳴、だんかうばいの黄色い花の間から見る銀と青との夢のやうな山脈。都心の街角をヒヤシンス色の風の流れる頃、さうした遠い映像が次から次へと山郷の絵を生んで、遊志はそゞろに動いて止まないのである。

八年ばかり前の三月も半ごろ、友達と三人連れで所謂奥高尾を縦走した事があつた。其頃は景信の山頂にも陣場ケ峰のてつぺんにも未だ小屋などは無く、第一、奥高尾などといふ物欲しさうな名も附いてはゐなかつた。風は少し有つたが実に申しぶんの無い快晴の一日で、景信の頂上からは房総半島も見えれば南アルプスの白金の峰々も望まれた。誰でも知つてゐるあの起伏の多いS字形の長い尾根通し、それを堂所、萩の丸、陣場ケ峰と雪解けのぬかるみ坂に滑つたり小笹を踏み分けたりして歩いて行く間ぢゆう、麗らかでゐながら一抹の澄んだ物悲しさを含む早春の気がずつと私達を支配してゐた。それが又ひどく嬉しかつた、それが味ひたければこそ出掛けて来たわけでもあつた。ところで斑々たる残雪と茶色に枯れた萱戸の山の陣場ケ峰、その陣場の頂上を北のほう和田峠へ降らうとするかなり急な坂道の途中で、私は折柄花を着けてゐる一株のまんさくを見つけた。成程東京の暮から正月、栽培したまんさくの切花ならば山茱萸や蠟梅と一緒に大抵の花屋に有る。だが思つてもみたまへ。それはあんな薄暗い店の片隅に、藁で括られてゐる哀れな花とは違ふのだ。それは山々谷々の広大なパノラマの前景、冬枯の尾根の残雪の傍ら、さへぎる物もない早春の青空と太陽の下で、繊細極まる黄金色の花を三月の風に顫はせてゐる野生のまんさくなのだ。私は喜んで其の一枝をルックサックへ挾みながら、山の早春を旅に挿した思ひをした事だつた。

東京では桜も散つた四月末、しかし甲斐の山里は春が漸く水のほとりから動きはじめて、御嶽昇仙峡の谷間では溪流の響を縫つてみそさゞいの囀りが流れ、聳え立つ花崗岩の嶮崖に朗々たるおほるりの笛がこだましてゐた。それは五年ばかり前の甲州から信州への一人旅の第一日で、其日は荒川奥の下黒平まで、翌日は雪の木賊峠を越えて増富温泉へ泊らうといふ、謂はゞ取つて置きの「春のさすらひ」の折の事だつた。私は御嶽で遅い中食を済ますと、午後の三時頃猫坂の頂上へ立つた。そして下黒平まで後もう半道といふ気安さに、わざわざコツフェルで紅茶をいれたり、日当りの岩に腰をかけてパイプを燻らしたりしながら、好い気持になつて此の山中の静かさと見事な風景とを楽しんでゐた。

標高一一三八米と云はれる此峠は黒富士と中津森山との中間に位して、北東は深くゑぐれた荒川の谷を縦に見て金峰山から国師嶽への眺めは素晴しく、南から南西へは視野が一層開けて、眼前の太刀岡山の左に氷雪を塗り

こめた悪沢嶽や赤石嶽の峨々とした峰頭が雄渾な障壁を峙てゝゐる。風は冷やかだが日の光は暖かだつた。悪沢の雪が日蔭になつて青い玻璃のやうに空の色を反射してゐる一方では、金峰の雪が西へ廻つた日光を浴びて燦爛と金色に輝いてゐた。

と、私は自分の直ぐ近くで何かの動く気配を感じた。風に吹かれて転がる枯葉か、それとも何か鳥かなと思つた。そして静かに頭をめぐらして其の気配のした方へ眼を移すと、それは一匹の栗鼠だつた。私は好奇と喜びとの眼を見張つて改めて其の栗鼠を見直した。今、小さな動物は私から二間ばかり離れた低い木の幹に逆さにつかまつて、其の房々した長い尾の先の方を心持巻上げながら、じつと身動きもせずに私を見てゐる。其の黒燿石の粒のやうな眼の愛くるしさ、其の足の指の小さゝ！　と、今度は素早く身を飜して幹を駆上り、太い横枝に棲まつて又じつと動かない。やゝ暫くすると又する〳〵と駆下りて来て木の根方の所へ尾を巻上げてうづくまる。そして絶えず私を見ながら決して遠くは去らないのである。あゝ私は斯うして三十分間も此の可憐な栗鼠と人も通らぬ峠の上で暮らしながら、別れに臨んで一片のパンのかけらを其処に残して立去つたのだつた。南アルプスも暮れ、金峰もたそがれ、春未だ早い甲斐の山奥の谷間に青々と夕べの靄の立ちこめる頃、今宵の泊の下黒平をさして急ぎ足に、しかし心は平和と歌とに満たされながら！

（「旅」昭和十二年三月号）

山あるき

学生の〝冬季〟のために

東京附近の冬から得られるいくつかの独特な楽しみの中で、所謂オープン・エーアの礼讃者のためには、私はスキーを必要としない山歩きを挙げたいと思ふ。集団的な場合には如何にしても避けがたい喧騒や秩序の混乱・一定の時刻に特定の乗物に乗らねばならない所からの束縛や、さうした場合に必ず見られる人々の節制なき行動に直面して、折角の楽しみの予感も記憶も蹂躙されてしまふ不愉快さ。其他有り得べきさま〴〵の好ましからざるシチュエイションに恐れをなすであらう人々にとつて、別に又静かな、快適な山歩きもあるものだといふ事を私は指摘したいのである。

私は冬なほ暖かい何処かの山の南向きの斜面で、脚を投げ出し、軽いルックザックに片肱を托して、あたりに花と咲く日光や静寂や、眼下に点々とする谷間の部落や青い遠方を我が物としながら、瞑想したり読書したりしてゐる孤独の学生を、高等学校や大学の山岳部員でない学生を、此頃に一人でも見掛けた事があるだらうか。山が迎へるあらゆる種類の賓客の中で、尚かつ洩れてゐる人々がありとすれば、それは恐らく此種の人達であらうと思ふ。

なるほど其の人達にはもつと切実な問題や、関心事があるかも知れない。時勢が時勢ならば、恐らく彼等こそ斯うした境涯から誰よりも純粋に、一層高尚に学ぶだらうといふ事が考へられるのに、彼等の心がそんな世界まで流れて行くにしては、今日、その社会的・精神的周囲が余りに冬の氷に張詰められてゐるといふ恨みがあるかも知れない。しかし、それだからこそ尚私は云はなくてはならない。母なる自然は、彼女の胸に求める者のためには、常に解決・頓悟の契機に満ちみちてゐると。

彼等の偉大な先輩の一人が云つた言葉、「今でも浅間の火口へ身を投げる人は絶えないさうである。さういふ人達が、もし途上の一輪の草花を採つて子細に其の花冠の中に隠された生命の驚異を玩味するだけの心の余裕があつたら、恐らく彼等は其場から踵を返して、再び人の世に帰つて来るのではないかといふ気もするのである」（寺田寅彦氏）。此深く美しい言葉はひとり私の「眠られぬ夜」のための慰めのみではなく、ひろく彼等への優しい鼓舞でなくてはならないであらう。

めぐつて来た日曜日、ルックザックには各自好みの食糧と一二冊の書物と描けるならば淡彩の道具なりと軽く納めて出掛る楽しさ。出来るだけ都人士の喧騒から外れたルートをみづから選んで、或乗物の沿線から他の沿線まで、質朴な部落を歩き、谷を渡り、峠を越え、尾根の灌木や山腹の枯草の中に憩ひ、雲に、風に、日光に心を解き放つて、それぞれ

の魂の幸福を創造する事こそ、わけても万物が露はにされて自然が光彩陸離たる冬山の最も実りある贈物ではないだらうか。

（「帝国大学新聞」昭和十三年十二月五日）

峠の早春

庭の暗い片隅や北側の崖にまだ雪は消えないが、日毎に明るんでゆく薄青い空間には、もうにはとこの枝が樹脂にぬれた新芽を光らせ、南の日当りや路傍の暖かい石垣では、どこかの暗やみから出て来た越年の蝶が、赤や紺色のビロードの翅を夢うつゝの中にひろげたりたゝんだりしてゐる。

冬はすでに老いて春はまだ幼いかうした微妙な季節が訪れると、私にはなんといふことなしに比企だとか、入間だとか、秩父だとか、武蔵野の北西のひとゝきは青い空の下に横たはる、さういふ古い郡の名がなつかしく思ひ出されて、一人漂然と行つて見ずにはゐられなくなる。

◇　◇

朽ちかけた牧柵の一部が見えて、二人の旅人が下のはうの平野を眺めながら休んでゐるこの絵も、やはりさうした遠足の時の記念だ。高麗川の上流、吾野の谷奥、秩父の正丸峠から北へ一里ばかりの所にある大野峠の上である。

◇　◇

昨夜たつた一人で泊つた刈場坂のヒユツテを出発して、早春の雪の香のする朝風と麗らかな日光の中を、尾根通しに堂平山目指してぶら〳〵歩いて行くとこの峠へ出た。左手には深く喰込んだ蘆ケ久保の谷を隔てゝ、美しくたくましい武甲山が手にとるばかり。右手は堂平山や笠山から生れた支脈が賑やかな比企の丘陵地帯をなして、その果てには埼玉の野が霞の庭にひろがつてゐる。

私はすつかりこゝが気に入つて一時間ばかりすわり込んでゐた。日光といはず、大きな空間といはず、眼の前の枯葉といはず、ぼんやりふるへる遠景といはず、自然の一切はもう呱々とした春の大波にひたつて、静かさにも生命が満ち、風にもあこがれの歌があつた。

◇　◇

そこへ麓の大野村から二人の旅人が登つて来たので、取あへず自分の詩情を絵にしようとその二人を写したが、後で聞けば一人は諸国を渡り歩く祈禱師であり、もう一人は飛出した女房を連れ戻しに行く大工だつた。

早春にはやはり早春らしい一抹の哀愁がある。

（「報知新聞」昭和十四年二月十七日・文末に「行程。池袋（武蔵野鉄道）―吾野（バス）―正丸（以下徒歩）―奥武蔵刈場坂峠―大野峠。日帰り費用、二円乃至三円。」という補足がついている）

編集部注　「峠の早春」「山麓の村」「山峡の春」はいずれも喜八撮影の写真付、題字及び氏名は自筆となっている。

山麓の村

正月の休暇もあと一日で終らうといふ日に、女学校の一年生と中学の二年生とを連れて武州秋川右岸の臼杵山へ登山した。女の子のはうはもうアルプス銀座も槍の頂上も経験してゐるが、中学生のはうは未だほとんど山といふものを知つてゐない。それで登山の楽しみの第一課を授ける傍ら、地理学や博物学の実地指導もしてやらうといふのが叔父である私の肚だつた。

◇　◇

五日市の駅から半里ばかり西へ行つた本郷でバスを捨てゝ、秋川の支流盆堀川のほのぐらい静かな谷へ入ると、深い浸蝕をうけたその谷の冷たい水辺ではもう河鴉が早春を思はせる奇麗な囀鳴をひゞかせ、大きな岩磐から生えた樅の樹の枝には五六羽の山雀が群れて、複音のハーモニカのある孔を吹くやうな、さびた地鳴きを聴かせてゐた。新鮮な朝の心や眼をもつてゆつたりと歩いて行く谷間では、見る物のすべてが讃美の対象であり、豊かな意味に輝くものだつた。子供達は小鳥の名を一々手帳へ書込んだり、黒い粘板岩の薄片を丁寧に紙にくるんでルックサックへ納めたり、またもつと先へ行つて礫岩の層が現れると、その中へ挟まつてゐる角岩を取つて放散虫の有無を調べたりした。

◇　◇

臼杵山の頂上へは、絵のやうな盆堀部落の外れから小さい山の鼻へ取りついて、それから尾根伝ひに約一里ほど登つて行くのだが、盆堀川と秋川との分水界をなしてゐるその尾根へ出た時、とつぜん眼下に展開した秋川沿岸の美しい山村風景の一部分がこの写真である。正面一帯の山は馬頭刈山の南東の美しい裾で、その下に二箇所ばかり農家の聚落の見えるのは乙津の部落、それから左手前の檜の植林の下を深くうがつてゐるのが秋川の溪谷、更に街道を挟んで人家の点々としてゐるのは荷田子の小部落である。臼杵の山頂からの展望も悪くはないが、あまり暑くならない三月から四月へかけて、私はこの尾根上からの見事な聚落景観の眺めと、平和な盆堀部落あたりの春の逍遙とのために、一日の休みを割いても決して惜しくはあるまいと思つてゐる。

（「報知新聞」昭和十四年二月十九日・文末に「行程、武蔵五日市（バス）—本郷（以下徒歩）—盆堀—臼杵山—同じ路を帰る。あるひは臼杵山—本宿—十里木（バス）—武蔵五日市。費用、新宿より往復約二円」という補足がついている）

山峡の春

武州御嶽山を中心に楽々園、射山溪、鳩ノ巣、数馬、氷川へかけて、いはゆる奥多摩の春の日曜日は、遊山の都人士を載せたバス、ハイヤー、それに団体や家族連れの徒歩の遊覧客でいたるところ織るやうな盛況だが、その綺羅と雑沓の本通りから逸れて、ひとたびどつちか傍道へ足を踏みこめば、これはまたうそかと思ふやうにしつとりと落着いた、味深い春の小天地にめぐり合ふ事が出来るのである。

◇　◇

そこにはもう白茶けた舗装道路もなければ、その暑い照返しや不愉快なほこりもない。酒気も歌舞もこゝまでは侵入して来ず、派手なスカーフやヴェイルもこゝではひるがへらない。路は細いがしつかりして、苔蒸した岩が涼しく、日陰ではいつでも枯葉や水の匂がしてゐる。草といはず木といはず、いろんな植物が花を開いたり、芽を光らせたり、やはらかな新緑をほどいたりしてゐる。それを一つ一つ楽しんで見てゐても、優に一日は暮せさうだ。かうした処では小鳥も多い。鶯は耳につき過ぎる程だが、四十雀や山雀、センダイムシクヒや大瑠璃、それにキビタキなどの春の歌が、ぢつと立止つて耳を傾ける人の心をうつとりさせる。目を上げれば、薄緑や銀色に煙つてゐる山の斜面に、満開のミツバツヽジやヤマツヽジが真昼のかゞり火のやうだし、岩をぬらして清水のしたたる日かげには、ヒカゲツヽジの硫黄いろの花や、イハウチハの薄桃いろの花がひつそりと咲いてゐる。このあたりに多い檜の植林に近く、少し水湿の斜面には、やがてテツパウユリのやうな花を幾つか着けるウバユリも見出されるし、尾根道の雑木の樹下には淡紅いろのカタクリの花もおびたゞしい。

◇　◇

この絵もさういふ路の一つで、場所は奥多摩溪谷の古里附から多摩川を渡つて一里ばかり南へ入つた越沢の部落である。ある年の春、私達は氷川から溪谷の右岸の道を神庭、梅沢、上坂と逆に東へたどりながら、大楢峠といふ小さい峠を越えてこの越沢へ降つた。ちやうど小梨の花の盛りの時で、その静かな美しさが春の谷間を一層感銘の深いものにした。

◇　◇

人出に誘はれて出掛けるのでなく、本当に一日の山の春を楽しみたいといふ人は、少し工夫してかういふ静かな場所を選ぶがいゝと思ふ。ハイヤーなどを飛ばして本通りを往復しながら、奥多摩の俗化を歎くなんぞは、実は甚だ見当違ひだといはなくてはならない。なぜならば自動車などの入る所に今日自然も醇朴も有りはしないからである。そして山一重、谷一重が、奥多摩のやうな場所でさへも、卑俗と純粋とを未だはつきりと隔てゝゐるのである。

（「報知新聞」昭和十四年二月二十一日・文末に「行程。立川（青梅鉄道）—御嶽終点（バス）—古里附—越沢—御嶽山（あるひは梅沢）新宿よりの費用、約二円五十銭」という補足がついている）

早春の田園

典型的な冬の形式だといふ西高東低の気圧配置もどうやら崩れて、三月といへばもう争はれない春の気配が、自然の中のいちばん柔かな、いちばん感じばやい、いちばん流動性に富んだ個所から、溶けはじめたり、綻びたり、動き出したりして来る。さういふ徴候を太陽の光や、空の調子や、風の触感や、雲の陰影や、梢の色や、鳥の声や。その他毎日眼に触れるあらゆる物の上に注意するところに、長いあひだ春を待つてゐた心の新鮮な驚きや悦びがあり、生甲斐のやうなものが感じられるのではあるまいか。

冬が未だすつかりは去らず、さうかと云つて春も未だ極めて幼いといふ、所謂早春の微妙な二三週間。この貴重な瞬間を深くしみじみと味つて、ほかの季節では到底見られないやうな純粋な、鮮明な、玲瓏たる印象に眼を悦ばせ、心を富ませたいと思ふならば、山に近い村里を歩くのがいちばんいゝと私は思ふ。其処では人々の生活も都会とは違つて、冬ぢう殆ど活動を阻まれてゐただけに、再びめぐつて来る春への期待や悦びもずつと大きく、その営みも活潑であり、また地形的・交通的条件も異るだけ其処には平野の田園よりも一層豊かな、一層纏りのある情緒や風景が展開してゐるからである。

もしも誰かが私に向つて、さういふ処へ連れて行つてくれといつたらば、私はさしあたり手近かな場所として、府下西多摩郡五日市町から西へ一里ばかりの、所謂秋川渓谷沿岸の山村を選ぶだらう。そして先づ何処よりも、軍道（ぐんだう）の部落を見せようと思ふだらう。

軍道は、五日市から出るバスの終点十里木（じふりぎ）を北へ十町ばかり入つた、山あひの緩い斜面に巣を懸けたやうな小さい部落だ。戸数は数へる程しかないが、それぞれの家や畑の配置と云ひ、斜面を取巻く山の裾の出入りと云ひ、実によく纏まつた一幅の絵、一篇の詩をなしてゐる。

村を貫いて細いがつちりした路が爪先上りに登つて行く。その路の両側を小さい綺麗な流れがかなりの水勢で落ちて来る。これが村の用水で、引かれて飲水になつたり水車を廻したりし、又あたりに多い小鳥と共に此の村の歌ひ手にもなつてゐる。流れの岸には三椏（みつまた）が多く植えられてゐて、三月には其のビロードのやうな卵いろの花が、梅の花の白や紅と一緒に早春の薄青い空間から浮出して、実に美しい。この三椏が所謂軍道紙の原料になるのだが、大きな簾へ漉した紙を乾してあるのが、家内工業の風物詩になつてゐる。

農家は路に沿つて一段ごとに高い所へ建つてゐる。そのテラスの一つ一つを支へる石垣は大部分石炭岩の割栗を綺麗にならべた物で、年代を経たその石の面には地衣が繁殖して、爽やかな薄緑や白の斑紋を現してゐる。又その石の隙間には小さい植物が根を下ろして、南向きの此の暖い部落では、もう三月の初めから黄や薄紫の花を咲かせてゐる。

農家はもつと下の寺岡や乙津の部落のものほど立派ではないが、それでも其の草葺の切妻の屋根は見事だ。時代のついた梁や貫や束の渋色と、壁土の色とがよく調和して、平和な、安泰な感じを見る者の心に与へる。青空を雄大に簡潔に切つてゐる其の屋根の棟に岩ひばやしやがを植えて、そのしやがの花が陽春五月、山の微風に揺れてゐるところは忘られない風情だ。

畑も初めの内は矢張り整然とした雛壇状になつてゐるが、山に近づくに従つて次第に擂鉢形になる。三月だと麦の列が一面に緑の糸をならべたやうに見え、その間に昔山からころげて来た大きな岩石が横はつて、牧場の牛かなんぞのやうに見える。

此の軍道の村をどんづまりまで登つて行つて、さて首をめぐらして天地の早春と村全体とを眺めやつた時、人はきつと口ずさまずにはゐられまい。あのアイヒェンドルフの悲しいまでに美しい詩「涼しい谷間に水車は廻り」を。

軍道！　これこそ一つの山村の真珠である。

（「アサヒカメラ」昭和十四年三月号）

遅れた春日の々から

「時には私の周囲にゐる他人が、私の個人的な生活感情を増大させる為にのみ動き廻つてゐるのではないかと思はれる事

があつた」

アンドレ・ジイド「地の糧」

三月十二日

「四季」の二月号に載つてゐる友人T・Kの「ヴァリスのリルケ」といふ紹介風の小さいエッセイは、重苦しい雲に暗澹と被はれた野の遠方に、明るく日に照らされてゐる土地の一角を見た時のやうな、何かしら慰める力のある楽しい小品だ。やゝもすれば排他的・錬金術的な方法で行はれてゐるかに見える我国昨今のリルケ研究の密室のやうな空気にくらべると、此の友人の取りあげた新しい視野は、溢れるやうな空気の躍る仏蘭西の春の果樹園や、純潔清新な太陽と氷と、古く落着いた伝統とを持つ瑞西のヴァレー高地の田園に向つて、明るくひろびろと解放されてゐる。そして事実此のエッセイはリルケが仏蘭西語で書いた二つの詩集「果樹園（ヴェルジェー）」と「ヴァリスの四行詩（カトラン・ヴァレイザン）」とを主題にして、それに註釈と理解と愛の肉附けを施したものだが、元来筆者の凛性や傾向に最も適応したテーマだけに、詩と作曲との理想的な協力の場合のやうにみづみづしい直観に貫かれた、心を悦ばす歌になつてゐる。斯うした物を読む時、Kは今の日本の文学界に於ける実にユニツクな美しい存在だと私は思ふ。

その中に出てゐる「ヴァリスの四行詩」の日本訳を一篇だけ写して置かう、

地と空とのあひだの
路の途中に停つてゐる土地、
水の声と青銅の声とを持ち、
優しくて厳しく、若くて古い土地、

受容れようとする両手のはうへ
上げられた供物のやうに
美しく完成してゐる土地、
それは麺麭のやうにあつたかい！

「水の声と青銅の声云々」の二行は、原詩では

aux voix d'eau et d'airian,
doux et dur, jeune et vieux,

となつてゐるが、仏蘭西語の持つしなやかな音楽性と光輝とへのリルケの日頃の憧れが、こゝでナイーヴに満足されてゐるのではないかと思はれた。最後の「あつたかい！」は、先行する言葉との関係から見て、矢張り「あたたかい」とした方がいいやうである。

三月十三日

家の者に頼まれて三越本店へ買物に行つた序に七階の洋書部を見て廻つた。文学物の輸入が遠慮されてゐるせいか、其の方面の新刊書は殆ど見当らない。それにも拘らず従来の在庫品はどしどしさばけて行くとみえて、棚の上が見るたびに寂しくなる。それでも独逸書の所でリルケの「新詩集（ノイエ・ゲディヒテ）」を、仏蘭西書の棚でフランシス・ジャムの詩集「ジャン・ド・ラ・フオンテイヌの墓」を手に入れる事の出来たのは寧ろ僥倖であつた。此頃では容易に手に入らない原書の有難味を痛切に味つてゐると同時に、もう以前のやうに豊富な新刊書の陳列の中から気に入つたのを二三冊択りぬいて買込んで、其の足で隣の食堂へ行つて、先づ飲物を注文してから徐ろに表紙を眺めたり、どこかの頁を拾ひ読みすると云つたやうな、あんな贅沢な東京の午後のひとときを、遠い昔のやうに思ふ事が多いのである。少くとも周囲の空気が美の瞑想なんぞに協力しなくなつてゐる事は事実らしい。

三月十五日

近所の小さい映画館でスタンバアクの「モロッコ」をやつてゐる。今更古い傷だらけのフイルムを不潔な小屋へ見に行く気は無いが、あの映画を私は好きだ。一切をかなぐり捨てた女主人公（ヒロイン）が奥地討伐の部隊に加はつて出発する男の後を追つて、灼けつくやうな熱帯の曠野を裸足でよろめいて行くあのラスト・シーン。だんだん遠くなる小太鼓の轟き、真昼間の虚空でバリバリ鳴る仏蘭西国旗、そして地平線の果てに小さくなつて行く女の後姿。あの素裸な人間本能の強烈な描写と、砂漠の永遠の哀愁とも云ふべきものの表現とが強く私の胸を打つたのだつた。

いつか書いた「荒寥への思慕」のやうな物の広がりの中にこんな世界の残響が無いとは私にも云へないのである。

今にして熱烈なエミール・ヴエルアランと、あの詩人を此世で最も好きだつた昔とが思ひ出される。

三月十七日

上井草の広い畑地で雲を撮影した。

雲の形や、其の移動する方向や、天空の各層に於ける其の分布の状態等から、素人の天気予知の手懸りを見出さうとして続けてゐる私の別の方面の仕事である。撮影には大して苦労も無いが、面倒なのは其後の天気の変化を一々記録して置く事と、その変化に従つて印画を分類整理する事とである。我子よ、早く大きくなつて此の父親の手助けをして呉れ！

今日は朝の内は晴れて、風景にボウツと霞の懸つた暖い日だつたが、昼頃になると大気の不連続面が移動して来たせいか急に風が起つて、南西の方角から不気味な黒雲（層積雲）が現れ、いかにも早春らしい驟雨が暫くは、庭の沈丁花や連翹の花を叩いた。午後二時半ごろ上井草のひろびろした野中へ立つと、あの険悪な雲が去つて太陽の光を見るやうになつた代りに、気温がぐつと下り、不連続線の後方を承はる雲らしい高層の軟かい厚い幕が、ちやうど空の半分を被ふて徐ろに東へ移つてゐるところだつた。此の不連続面は所謂寒波面で、温暖な気層の下へ寒冷な気流がもぐり込んだものらしい。頭の真上を静かに東のはうへ去つて行く此の高層雲を眺めてゐると、その運動はたゞ平らに辷つてゐるのではなくて、どうやら南北をつらねる水平軸のまはりをゆつくり廻転してゐるやうに観察された。晴れた方の空から射す太陽に照らされて出来た微妙な濃淡の色合と、その為にわかる雲底の曲率と、雲の繊維状組織の動く具合などからさう観察されたのである。

更にもう一つ心を惹かれて撮影したのは、北のはう三里ばかりの遠方で此の大規模な高層雲の裾の所へ出来た三つ四つの非常に顕著な、美しい、大きな乳房雲だつた。それは普通に積乱雲の底や側面などに出来るやうなあの陰惨な乳房雲ではなくて、遠い土地の青空のへりに咲く巨大な花の蕾のやうに見えた。多分武蔵野の其の位置の上空に一種の渦動が出来た為のものと思はれるが、其の真の成因にいたつては到底私などには分らない。此の優美な乳房雲は撮影十分も経たない内にもうすつかり崩れて原形をとゞめなかつた。そして日光はあまねく風景を照らして、上井草の麦畑の上では雲雀が囀り、ナヅナやタチツボスミレが小径のへりをいち早く飾つてゐた。

此日午後十時快晴、気温零上二度半。翌日午前六時晴、気温零下二度半、霜。

三月二十日

或る植物学の本で、連翹の花には雌蘂が雄蘂よりも長いのと短かいのとふた色あるといふのを読んだ事を思ひ出して、今朝は庭へ出ると早速調べてみた。成程その通りで、十字に開いた黄いろい合弁花冠の中央に同じ色の雌蘂が立ち、其の柱頭から二ミリぐらゐ下の所を左右から二本の雄蘂の葯が抱いてゐる。そして其の本にも有つた通り、宅の庭にたつた一本しか無い此の連翹に着いてゐる花は何れも雄蘂の長い方の種類らしく、短かいのは一輪も無かつた、近所の家の庭にもそれぞれ此の木が植はつてゐて、路を歩いてゐると生垣越しに黄いろい花がちらちら見えるが、それを一々見せて貰つたら雌蘂の短かい株に遭遇する事も有るだらうと思はれる。長い方を第一型とし、短かい方を第二型として、同型同志では花粉が附着しても実を結ばず、異型の間で初めて結実を見るのださうであるが、之なども指摘されて漸く問題となる日常自然の不可思議といふの外はないやうである。

かうした二型花柱を持つた花では桜草が最も有名であるが、蕎麦の花にも矢張り二つのタイプが有るのださうである。美しい聯想に豊かな連翹や蕎麦や桜草。それを句にして歌にする詩的直観の世界もいいが、指でつまんだり手の平へ載せたりして限なく調べ考へるところにも、また三昧の境地は有るのである。仏蘭西で発行された「海の驚異」といふ美しい貝殻の図譜に、詩人ポールヴァレリーが実に立派な精厳な貝のエッセイを書いてゐる。一民族の至つて素朴な特権意識を振廻して精神の地方主義に終始してゐる限り、世界文化に貢献するなどといふ事は言ふべくして行はれ難い事ではないかと思はれる。

（「山小屋」昭和十四年五月号）

Wild Life の本

もう五十にも近いといふのに、今だに春が来ると待ち兼ねたやうに捕虫網を持ち出したり、胴籃を肩に植物採集に出かけたり、雙眼

鏡をもつて所謂 Bird-Watching をやつたりする事を無上の楽しみとしてゐる私は、たまたま新聞や雑誌などで自然界の事柄を「楽しんで」書いた文章に接すると、思ひがけない見つけ物でもしたやうに人一倍の悦びと同情とを感じるのである。そしてさういふ文章はなるべく切り抜いて保存するやうにしてゐる。

ところが此種の読物が、従来とても多くはなかつたが、最近は殊に少い気がする。勿論切迫した時局の然らしめるところだとは思ふが、それにしても人の心の静かな悦びは悦びとして表現されてもいいのではあるまいか。さういふ文章はそれを書く人の幸福の自覚が深ければ深いだけ、乾燥になやむ吾々の心への滲透度も大きいわけである。近頃では伊豆の海辺に病を養ひながら其の土地で採れる小魚の事を書かれた中谷宇吉郎氏の「雑魚図譜」の如きが丁度さういふ物であつた。

よく思ふことだが、英語で所謂 Wild Life といふ言葉くらゐ日本語に訳しにくくて、しかも原語だとかなり明瞭なイメイジを吾々に与へる言葉もすくない気がする。無論浅学のせいではあらうが私などには今だに適訳が思ひ浮ばないのである。Open air なども矢張り此の仲間のやうに思はれる。そして斯ういふ平易で含蓄のある言葉を持つてゐる英国にして初めて、Wild Life や Open air に関する文学が独特な発展を遂げ得たのではないかといふ気がするのである。

英国の此種の文学の中でいつ読んでも津々たる興味を覚えるのは、私の場合では W. H. Hudson の書物である。Nature in Downland や Adventure among Birds などを手にして英国の自然の中を歩きまはる事が私などには到底許さるべくもない望だとすれば、せめて斯うした澄んだ瞳と静穏な魂とをもつて祖国の自然を見直したいといふのが私の願である。こんな願を持つ者にとつて、Hampshire Days とか Afoot in England とか Land's End とかいふ書物の名が、すでに充分の誘惑ではないであらうか。ハドスンの著書は出来るだけ集めて読んでゐるつもりではあるが、四年程前にエヴリーマンス・ライブラリーで初めて刊行された A Shepherd's Life を手にして一層彼への傾倒を深めた事であつた。これは亡びて行く牧者の生活や伝習の記録を経としながら、今も尚ふるい美しい田舎と自然とを残してゐるウィルトシア地方の描写を緯とした、まことに大牢の滋味とも云ふべき書物である。ハドスンの物は今後も追々此の叢書に加へられて行くやうな話を聴いたが、斯ういふ立派な文学を誰にも手に出来る廉価本で、しかも同じ国にゐて同じ国語で読むことの出来る英国人といふ者が一寸羨しく思はれるのである。

エヴリーマンスと云へば、博物書の聖典と云はれるあの Gilbert White の The Natural History of Selborne が此の叢書に入つてゐる事はすでに衆知の事柄だらうと思ふ。

ハドスンと並んで思ひ出されるのは Richard Jefferies である。私の知つてゐる限り日本では未だ彼の The Story of My Heart のほかには翻訳が出てゐないやうであるが、此のソイルド・ライフの哲人の真面目を知らせたい希望を持つてゐる人で幸に原書を手に入れる事が出来るならば、さしづめ彼の Wild Life in a Southern Country とか The Life of the Fields のやうな本を訳されたらさぞかし善いだらうと思ふ。私の或る友人で五年ばかり小樽にゐた人が今彼の The Open Air の大半を訳了してゐるが、小樽・札幌を中心に北海道の山野に深く親しんだ此の友達は、此本を訳するのにどんなに其の地での自然観察が役に立つたかを私に述懐した。巻頭の「ギドー」に現れてゐるやうな自然は実際内地にゐては見られないだらうと思ふ。

尚 Cobbet の Rural Rides や George Borrow の Wild Wales などの事も述べたいが今は割愛する事にする。

最近にその廉価版が出て実に興味をもつて読んだのは Grey of Fallodon の The Charm of Birds であつた。グレイ卿にはすでに有名な Fallodon Papers があつて、私などは其の中の「読書の楽しみ」や、とりわけ「自然に於ける楽しみ」を愛読してゐたが、其の「自然に於ける楽しみ」の主要な題材となつてゐる野鳥の観察が此の「鳥の魅力」の全篇なのである。第一章から第七章まではノーサンバーランドの田舎で一年中の月を追ふて聴かれる鳥の精細を極めた観察記である。第八章からは鳥の家族生活、巣と卵、喜びの飛翔と喜びの音楽、孰公と雀、鳥の馴らし方、水禽といふやうな順序で第十四章に及んでゐる。あ

れだけ多忙な大英帝国の役人生活をしながらよくも之程細かい観察が出来たものだと感心させられるのであるが、しかも其の観察が殆んど週末の別荘生活からの収穫なのだから、如何に国柄や境遇が違ふとはいへ、我国の大臣や次官のやうな人達の事を考へると人物の点でもかなりの相違があるやうに思はれて興味がなくはない。此本は出来るならば広く読まれるといゝと思ふが、殊に我国の所謂野鳥研究家諸君が読んだならば、必ずや尠からぬ利益や教訓を得ることだらうと思ふ。序でながら一般の読者としては、なるべく英国の野鳥図鑑、たとへば Edmund Sandars の A Bird Book for the Pocketのやうな物を座右にして参照されたならば一層興味がありはしないかと思ふ。普通の参考書としては是で充分間に合ふし且つ推奨するに足る程のいい本であるが、それでも不足な人の為には The Wayside and Woodland Series の中の The Birds of The British Isles and Their Eggs をすゝめたい。

仏蘭西といふ国には元来自然に関する文学なる特殊の部門の発達が見られないやうな気がするが、それでも第一次大戦後巴里のStock書店からLes Livres de Natureといふ叢書が出て此の方面の開拓につくしてゐる。シートンの「動物記」やハドスンの「ラ・プラタの博物学者」、「パタゴニアの閑遊録」のやうな物の翻訳も初めて此処から出た。しかし此の叢書で仏蘭西の自然文学のためにミシュレーやファーブル以来気を吐いてゐるのは叢書の鑑修者である Jacques Delamain の Pourquoi Les Oiseaux Chantent (鳥はなぜ歌ふか) と Les Jours et les Nuits des Oiseaux (野鳥の昼と夜) の二著である。此処では舞台が全く仏蘭西の土地と自然とであつて、描かれてゐる鳥も実によく其の穏和な国土に調和してゐる。六七年前に此の二冊が Why Birds Sing と Days and Nights of Birds と云ふ訳名で英国で出版されたが非常な好評を博して、「鳥或は自然に関してこれ以上美しい書物を想像する事は出来まい」といふやうな讃辞さへ受けた。そして私はハドスンを別にすれば英仏を通じてこれ以上美しい鳥と自然の文学はあるまいと思つてゐる。此のジャック・ドウラマンから私は写真を贈られて持つてゐるが、彼は六月のガロンヌ河の岸辺で雙眼鏡を眼にあてゝ魚狗(かはせみ)の観察をしてゐるのである。此の魚狗の観察記や「雀(から)類の巡羅」や春夏秋冬の「夜」のやうな文章は、仏蘭西文学の一方に新らしい光芒を放つてゐるもののやうに私には思はれる。

独逸の本で此頃興味深く読んだのはFriedrich Schnack の Das Leben der Schmetterling の英訳 The Life of the Butterfly であつた。蝶と蛾との生態を一種独特な瑰麗な文章で書いたもので、彼等の春から夏へかけての生活が日光を透して輝くステインド・グラスのやうな豊麗富憺な詩的文章となつて描かれてゐる。此本をかのヘルマン・ヘッセが推賞してゐたが成程と思はずにはゐられなかつた。

尚も書けば幾らでも出て来さうな気もするのであるが、余り長くなるので、同好の士にすゝめたい二三の書名だけを挙げて今日は擱筆する事にしたい。

The Times Publishing Co.: The Opon Air Year.

B.T. Batsford Co.: Nature in Britain.

Edward Step: Nature Rambles (4 Vol.)

Edward Step: Nature in the Garden (2 Vol.)

（「学燈」昭和十五年三月号）

初心者を山へ

吾々には自分の好きな道へ友人を誘ひ込まうとする一種の傾向がある。又それほど積極的ではなくても、若しも他人に動くそぶりが見えれば、其の道へ誘つてみたい或るほのかな願ひのやうなものを感じるであらう。

此の後のやうな場合を、私は他人の生活を尊重する事を知つてゐる人と人との間のひとつの好意だと思つてゐる。

「君がやつてみる気さへあるならば、これは初めは大して面倒な事でもないし、やつてゐる内には今まで知らなかつたやうな事だの面白味が追々分つて来るだらう。そしてやがては君の器量で、君自身の好みや工夫や発明の力で、その新しい世界を君らしい仕方をもつて自由に闊歩するやうになるだらう。」

これが好意の誘ひである。力づくの強制でない、貪欲な醜い改宗のすゝめでない、相手

の自由を充分に尊重しながらの、新しい可能へのつゝましい示唆である。

このやうにして、昔、或る友人が私に独逸語をすゝめた。其のお蔭で今私は曲りなりにもゲーテの太陽に心を温めることが出来るし、リルケの詩を彼のほのぐらい地底の根に於て理解することが出来ると、少くとも自分だけはひそかに信じてゐるのである。

又私としては此のやうにしてジイドやヴァレリー以外の世界を、ジョルジュ・デュアメルの世界を、文学と心情との別種のパアスペクティヴとして、いさゝかの渇きを覚えてゐる人々にほのめかしたのである。

そして今日、若しも相手の動くそぶりが山へ向けてゞあつたならば、しかもそれが日頃から山好きに成らせたく思つてゐる友人の学者であつたならば私はなほさら逸る心をおさへながら、常に彼の読む本、彼の書く詩、また彼の描く画の事を心にうかべながら、問題を巧みに其等と関聯させながら、しかも自分の経験のうちの最も楽しく美しかつたものを選ぶ事も決して忘れずに、山登りの楽しさそのものを徐ろに、且つ淡彩のごとく描いて彼に示すだらう。けだし私にして此の相手の心を彼自身ひとつの立派な世界を持つてゐる友人の心を、山といふものへ誘ひ込まうと思ふならば決して私の愛する山々を毒々しい色彩で塗り立てたり、強い筆触で際立たせたりしてはいけないのである。そんな事は彼のやうな相手の場合却て逆の効果を生むばかりか、私自身をさへ、山に関するかぎりは俗物のやうに思はせてしまふ惧れがある！

私は現実と詩とを、平静と憧れとを、彼の想像の眼の前に叡智をもつて伝彩しなければならない。

私の最初の細心の努力は、或はかうして成功するかも知れない。それとも、事によると、相手が私のこまかな心づかひを諒として、其の成功に協力して呉れるかも知れない。どつちでもいい。私は或日の好運の天のもと、つひに友人を山へ誘ひ出すことに成功したのである。

しかし私は彼に登山に必要な服装や準備などを、嬉しまぎれに余りせかせかと要求はしなかつたであらう。寧ろ当然かのやうに、今持つてゐる物で沢山だと云つたであらう。紙幣一枚を渡して、そんならこれで買つて来いと云つた先生と、古道具屋で立派な鳥籠を捜しあてゝ、餌壺に餌まで添へて鼻高々と鳥を持参した御弟子とでは、文鳥に対する熱情にも幾らかの相違はあつた筈である。私は友人のと変りのない普段の服装で、たゞルックザックだけは自分が背負つて、二人分の弁当を運んだであらう。そして若しも新緑の山道が快適で、友人にして幾らかワンダラアの気分を味はひたひやうな気配を見せたら、私はこゝぞとばかり彼に其のルックザックを任せたであらう。そして我がキスリング型の袋の長所を、討論の第三者のやうにさりげなく語つたであらう。

私が友人の平生の健康状態を知つて居るべきは当然である。また山登りに馴れない者を先づどんな山へ、如何なる道筋によつて案内すべきかを考へるのは私の責任でなければならない。

その大多数が山に経験のない未成年者である二十幾人といふ法外な数を引率して、普通に歩けば楽に五時間あまりで其の頂きに立てる山に、わざ〳〵遠廻りをした為に時間を徒費し、しかも溪谷の奥から直接山頂を目がける困難な登攀を企て、つひに風雨の夜の寒気と極度の疲労とから数人の犠牲者を出すに至つたといふやうな不祥事は、結局リーダーが初心者の可能性を考慮に入れてゐなかつた事に根本の原因があるやうに思はれる。

山登りは楽しみの一つである。スリルの感覚にしろ困難の克服にしろ、それが結局は楽しみに還元せられない時、吾々のやうな者は何も求めて山を冒険する必要は無いのである。私がもう一息で彼を山頂に立たせることが出来ると思つたにせよ、若しも初心の友が最後の岩の登路を仰いで駄目だ！ と呟いたとしたならば、私はそのまゝ其処で登攀を中止すべきである。其時若しも強いて彼を登らせたならば、彼は其の場合の疲労や苦しさの思ひ出の為に次の機会を断念するかも知れないし、又若しも私が彼を置去りにして一人で其の山頂をきはめたならばたとひ事柄は小さくても、それが友の心を傷つけるかも分らないのであ

る。そして、それでは私の最初の好意はことごとく無になつてしまふであらう。

道連れの性向をわきまへ、その体力を考へ、彼をして己れが力で自由の天地を呼吸してゐるやうに信じ込ませながら密かに彼のために助力して、そして徐ろに其の道に歩み出させることは、ひとり山の場合のみではなく、実は指導者を必要とする此世の万般について最も大切な要訳のやうに思はれるのである。

（「帝国大学新聞」昭和十五年四月二十九日）

第二章　雲

深いエメラルドの空に金やくれなゐの雲の感動。
天涯未知の国のまぼろしが忽然と現れて、
今し此世に立ちどまつたやうだ。
（自作「バツハの夕空」から）

一　雲と私

英国の気象学者で、有名な雲の研究家ケイヴは、彼の著者の一つの中で、人類が雲の美を発見したのは余り遠い昔の事ではなく、恐らく十八世紀の末か十九世紀の初めの頃だらうといふ意味の事を云つてゐる。彼は多分ラマルクやリューク・ハワード、或はラスキンの時代を念頭に置いてゐるのである。然し文字といふものが無く、有つても今日のやうに行亘らず、たとへ書いても印刷に附せられる事の甚だ稀であつた昔には、よしや雲に人一倍傾倒し、その美に人一倍感じ易い人間があつたとしても、其の記録なり感動なりを書残して広く後世にまで伝へるすべは無かつた筈である。私は寧ろかう考へたい。人類は遠い昔から雲の美しさに気がつき、雲に注意し、それを大空に浮ぶ霊妙なもの、天来の使信、達しがたく遙かにして心を魅するもの、又時に怪異にして恐るべきものと観じてゐたであらうと。そして雲に対する幾百世代の此の憧憬や関心が、つもりつもつて後世の芸術ともなれば学問ともなつたのであると。嘆美や驚異から「真」の探求へ、「真」の探求からいよいよ豊かな美の再発見へ。人類の辿る斯うした道程は、又人間個人の自然な道程でもあるのではないだらうか。それでケイヴの意味するところが若しも此の再発見にあるのならば、私は敢て異を唱へる者ではない。

思ひ出すことの出来るかぎり遠い少年時代から私は雲を愛した。雲は私にとつて見知らぬ遠い世界へのいざなひであり、空想そのものの姿であつた。子供の頃から物にあこがれる心が強く、夢みがちに生きる事の多かつた私にとつて、幼年の日の青空に浮んでは消えた雲の姿こそ、孤独の魂をやさしく揺する最初の歌声でもあれば物語でもあつた。

誰一人として少年の私に雲を指して見せたり、雲の事を話して聴かせてくれたりする者はゐなかつた。そのくせ明治三〇年頃の、東京隅田川の河口近くにあつた私の家からは、今日よりももつときれいな、広々とした空に、雲は毎日出てゐたのである。庭や河岸ぶちの植物などについても同じ事だつた。誰も其等に対して私の幼い眼を開いてくれはしなかつたし、又知的にも審美的にも、さうした力を持つ者は周囲に一人もゐなかつた。父も、母も、雇人達も、皆忙しく其日其日を働くのみで、人知れず柔かに伸びつつある幼い魂、殊には自然に対して早くも見開かれた好奇の眼の事などは考へもしなかつた。四〇年後の今日、たまたま昔の家のほとりを過ぎながら、今もなほ東京湾の空に浮ぶ積雲をながめ、河岸の石垣のあひだに咲くナヅナやタンポポを見出しながら、私は深い感慨に打たれるのである。

然し今日大人から雲について教へられる子供達と、自分でそれを発見し、自分から親しみなじんだ昔の私のやうな子供と、結局いづれが仕合せであるかは、遽かに之を云ふことはむづかしい。私としては、然し、気質や傾向の導くままに先づ実物に親しみ、やがて良い指導者や書物について学びながら、自分で深く入つて行くのを、最も順当な自然な道だと思つてゐる。尤も私自身は遂に単なる雲の愛好者にとどまつてはゐるけれども。

刷毛で掃いたやうなのや鳥の羽根のやうな薄い雲よりも、山や群島のやうな厚味のある雲のはうが、即ち今の言葉で言へば巻雲型の雲よりも積雲型の雲のはうが、子供としての私の心を牽いたやうである。否寧ろ雲と云へば、春夏の空へむくむく上る積雲の事だけであつたかも知れない。私は其の雲を見るため

に、よく埋立後間もない其頃の月島へ行つたものである。鉄砲洲のはづれから佃の五厘渡しで隅田川を横断すると対岸は佃島。弁天様の横から磯臭い漁師町をぬけて、右へ橋をわたれば貝のかけらのきらきら光る月島の埋立地。一棟の家もない平坦な広い飛行場のやうな島には雑草がばうばうと生えて、其の尽きるところは一望の東京湾の水だつた。今の月島六丁目と東河岸通の処で島はまつたく終つて、其処に波の打寄せる石垣があつた。遠浅の海には沖へ沖へと澪標（みをつくし）がならび、其のむかうに、近くは御台場から遠くは房総の山々までが一目に眺められた。春ならば島のところどころにクローヴアが咲き、いつでも二、三羽の雲雀が囀つてゐた。そして夏はバツタの世界で、私は竹棒の一端を目笊へ挿込んで、それでトノサマバツタやクルマバツタを伏せて捕つた。

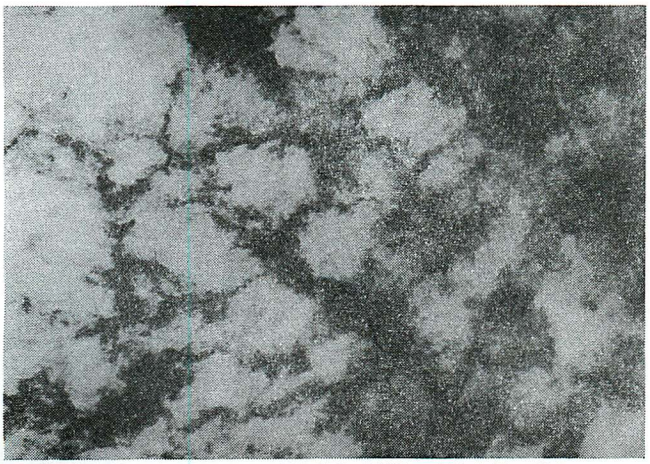
石垣の縁から両足をぶらさげて、青海苔や蟹や船虫なんぞの香のする潮風に吹かれながら、水平線の上にならんでゐる雲を飽かず眺めた遠い昔を思ひ出せば懐しい。窮屈な我家と都会の人生とはうしろの方、石川島造船所の鉄板を叩く音と、河口の空に林立する幾百といふ船のマストの彼方にあつた。此処では、物音といへば、石垣にびちやびちや当る波の響と、草の葉をそよがす風の音だけだつた。目に入るものといへば頭の上の大きな空、右手の御台場と左手の洲崎の鼻とに区切られて遠くひろがつた東京湾の水。さうして其の水と空とのむかうに、日に照りかゞやく雪の連山のやうな、寒水石の塊りのやうな積雲のむれ。ちやうど独逸の詩人たちの永遠の憧れである希臘や伊太利亜の空のやうに、それは大人ばかりの世界に生きてゐた私の魂にとつての唯一の救、たつた一つの解放の世界だつた。それが何時でも私を呼んだ。

かうして雲が、また自然が、其後の私の生活の伴侶ともなれば芸術の契機ともなつた。植物や小動物に親しむと同時に、私は絶えず雲に注意し、雲を眺め、独学でいろいろ雲のことを学ぶと共に、ますます深く雲の美に牽かれるやうになつた。怪しげな語学の力でラスキンの「近代画家」の雲の部分を懸命に読んだ。或日クラークの「雲」を手に入れた時には文字どほり狂気した。三宅武雄といふ人の「雲の見方」といふ小さい本を見つけた時には、日本にもこんな雲好きが居るのかと思つて嬉しかつた。それからたうとう藤原博士のあの素晴らしい「雲」が出た。之こそ私にとつては決定的な啓示だつた。それ以来私は雲と天気変化との関係に注意をしはじめ、雲を撮影し、記録し、同時に本来の詩業のかたはら、一人でこつこつと気象学を勉強したり、妻や娘に手伝はせて、道具は不完全ながら欠測の無いやうに、毎日三回の定時観測を続けたりした。

表で遊んでゐた娘が、「お父ちやん、綺麗な高積雲が出てるわよ！」と駆込んで教へに来たのは彼女が漸く七歳の時だつた。今私と散歩の道で、同じ高積雲の落下縞について私から教へられるのは十八歳になつた彼女である。幾年の間毎晩のラジオで全国天気概況や漁業気象を速記することに熟練した妻は、其の発表の無い今では、日毎の雲形や、雲の来る方角や、地上の風向などから天気を予測する事で満足してゐる。

かうして私の熱情は彼等にも何ものかを与へた。其の何ものに加ふるに幾らかの気象学関係の蔵書。それだけが貧しい私から彼等への遺産であつてもいい。若しも其の心にして謙虚であるならば、たとひそれだけを以てしても、尚且つ彼等は其処から無限の喜びを汲み得る筈だからである。

（『雲』昭和十七年刊）



「昭和15年9月28日12／midi KC（SW）雲量次第ニ増加」
と写真裏にメモ有り。

＊資料と回想＊

尾崎喜八と戦前の職業野球

こころざし

日本野球T軍の監督で二疊手のKが、北海道の試合の旅先から或日箱詰の鈴蘭を小包郵便で届けてくれた。

ドロノキか何かの材で造つた長さ九寸余りの、大工の道具箱の雛型みたいな白木の小箱の両側の板に、それぞれ五つづゝ円い小さい孔をあけて、内部の植物が運送中蒸れてしまはないやうに工夫してある。表と裏の長い蓋には叮寧に横桟まで打つて板の反りが防いである。そして箱の胴には漢字と羅馬字との双方で、出荷先の花屋かと思はれる店の名が印刷してあつた。

斯うして小さいながらちやんと荷造りの箱まで出来てゐるところから見ても、北海道の鈴蘭といふ物が私達の考へてゐる以上に有名で、且つ諸地方の都会に広く行亘つてゐるらしい事が察せられた。

それは兎も角として、札幌からの遠来の鈴蘭は、東京西郊の家の夜の茶の間で、人の厚意の匂のやうに馥郁と薫つた。私達は掬むにあまる其の花束を、金メッキを施した古い阿蘭陀の切子硝子の大コップへ盛つたのであつた。

それから十日ばかり経つた或日、私達は小石川後楽園へ夏季のリーグ戦を見に行つた。其時スタンドの廊下で次の試合に出場するT軍の投手Nに逢ふと、彼は何か新聞紙へ包んで紐で括つた物を、幾らかはにかんだやうに顔を赤らめながら私の妻の手に渡した。

「それ、なあに君」と私が聞いたら、Nは一層顔を赤くして「若布です」と云つた。「京都の若布です」

「京都の？」と聞き返すと、

「京都と云つても天ノ橋立です。天ノ橋立で採れた若布です」

此の天ノ橋立といふ地名を特に強調して云つた若い関西人Nの気持が、私には何となくほゝゑましかつた。

其日T軍は必勝の先取得点を手にしながら、どうした具合か試合半ばからNが打込まれて、遂に敗北を喫した。

帰宅後貰つた若布の包をあけようとして、括つてある紐を解きながら気がつくと、それは女柄（がら）のメリンスを細く平紮（ひらくけ）にした物だつた。

「鈴蘭を送つて呉れたり、若布を呉れたりするやうな優しい心を持つてるから負けるのよ。仕方がないわ」と、十七になる娘が最後の断案のやうに云つて、明日の学課の下調べに自分の部屋へ入り込んだ。

或はさうかも知れない。いや、多分それに違ひは無いだらう。彼等の心づくしの土産にはそれぞれの柔らかな人柄の匂がまつはつてゐた。そして私の理解するさういふ人柄といふものは、他の一面ではどんなに勝れてゐても、此世の押しや力づくの戦では往々負けてしまふ事も有るのである。

それにしてもあのメリンスの紐は、其夜私の心にしつとりした潤いを与へたやうである。それは其日夕方から又静かに降り始めた、梅雨の雨のためばかりでは無かつたであらう。

Nは名古屋の出身である。そして彼の名古屋の家には、老父や弟達と一緒に、母親と姉とがゐるのださうである。

（編集部注　この原稿は尾崎の書斎を整理中に生原稿のまま出て来たものである。何に載せたものか未詳。文中T軍は東京セネタース、Kは苅田久徳氏、Nは野口二郎氏である）。

セネタース時代の思い出

——尾崎喜八先生を語る——

苅田久徳

（聞き書き・勝畑耕一）

昭和十二年の上井草球場での出会いが、先生とはじめて呢懇にしていただいて、で、セネターズを応援していただくことになったんですよ。

それまではプロ野球というのは、二千から

三千のファンしか集まらないの。後楽園にしてもどこでも。その中には文化人もいて、もう亡くなられましたけど大田黒元雄、藤原義江、こういう人たちが必ずバックネットの後ろの方に陣取って応援してるんですよ。大田黒さんの方は巨人軍、あの双子の娘さんは巨人びいきなの。で、藤原さんは、岡田源三郎という明治大学の監督やってのちに金鯱軍の初代監督やった人、その人と小学校の仲間で、そういう関係で源さんと藤原さんは金鯱を応援するだろうと思ったけどそうではなくて、セネターズが好きだったんです。で、その当時藤原さんが「セネターズの太陽、苅田だ」なんてことをいってくれたんです。そういうこともあってから尾崎先生は、なにを思ってかセネターズびいきになってくれたんです。

貴族院議員で農林大臣もなさっていた有馬頼寧先生が、昭和十年に東京セネターズを創立して、西武鉄道と提携して上井草球場を建設したんだけど、その上井草のグランドが、先生の井荻のお宅から近いってこともあったんだろうと思うけど。

でも酒の席で、先生とそれほど野球の（技術）談議をしたことないのよ。野球のプロ、大家をさしおいてそういう話をしても、おかしいと思ったんでしょう。そういうんで、私自身、先生は野球に関しては、素人なんじゃないかな、と思ってました。まぁセネターズが本拠地を上井草に移したってことからお近付きになったってことだけれども、その、詩人であるってことはわかってましたよ。ただ詩人といっても派が違いますよ。サトウハチロー、藤浦晃だとか、売るために詩を書いている人たちとは。

私の住んでいた中野、沼袋の近所には、堀内敬三さんをはじめとしてずいぶんいろんな音楽家や声楽家が住んでたんです。そういう中で、先生は詩人の中でも変な唄（流行歌）なんかつくらない人だということは知ってました。

まだ後楽園球場がないときに、昭和十二年の春先でしたか、セネターズが上井草球場をフランチャイズにしてゲームがあって、上井草がプロ野球のメッカになったんです。洲崎球場がなくなって、早稲田球場も作わなくなったんで、上井草に移ったんです。

で、試合前か練習のときに、先生に会ったんです。とにかくグランドは二万人くらい入る程大きいのだけれど、その当時のプロ野球に関心をもってた人はごくわずかしかいなかった。その中の一人が先生だった。だからあそこに先生が来てるな、とか誰々がきてるなと思えば、ハンカチ振ればすぐわかった、そんな球場風景だったんです。でも最初のきっかけはどうしても思い出せない。

とにかくぼくとしては、一般のミーちゃんハーちゃんとはちがうファンとして、先生のことを意識してました。ですから先生との付合いはファンの中でも非常に大切にしたもの

ユニホーム姿で近所の子供たちと記念撮影する喜八
写真の提供者故・越知昌三氏の手紙から。「当時小生は北新川の中井という酒店の大番頭の原島という方のお世話になっており，尾崎のキーさんはその原島さんの甥御で，うちは北新川の大神宮（といっても小さなほこら）の隣りにあり，われわれの他近所の子供達が数人集まって，写真のような恰好をして野球をやったものでした。日曜にはネットをかついで越中島の商船学校の前の 空地へ 野球をやりに行きました。」
（後列，左から２人目が尾崎喜八）

です。

野口（注、当時のセネターズの投手野口二郎）のファン、浅岡（同、投手浅岡三郎）のファン、誰々のファンというのが、それぞれいた訳です。その中であたしのファンの中に先生がいた。

そんな風に先生と親しくなっていくうちにピッチャーの野口を連投させるかどうかで、試合中にアドバイスを先生からもらったことがありました。

「苅田くん、明日は雨だから野口をつぎこめ」とネット越しにいわれました。

それは先生が負けず嫌いだ、というところがあってのことだと思いました。（笑い）

「野口をつぎこめ、明日は天気がくずれて雨になるぞ」、とおっしゃる。連投ですよ。さ、それでその試合に勝ったか負けたかは記憶にないんです。（笑い）

そういうことがありました。

若い選手を七・八人連れてって先生のお宅にお邪魔したこともあります。先生が御自分で詩をつくられたセネターズの応援歌を、みんなで先生のオルガンに合せて唄ったりしました。

先生が沼袋の私の家に来て、うおすきなんかをやる訳です。そうすると酔っ払ってくると、その唄が出る訳です。他の高尚なファンもいたし、わけのわからない野球きちがいもいたけれど、詩人ということで尊敬してました。飲んだときは野球のことはそれほどはなさず、世間話が多かった、それから先生の詩のはなしなんかも。ヘルマン・ヘッセの翻訳本をもらったり、小さな詩集をもらったりしてました。野口、村松、織辺、浅岡だとかも、もらったような気がする。

だから先生の顔と字のかっこうは今だによく覚えている。

いまは快速が走ってるけれども、そのころは後楽園まで通うのは大変でした。尾崎さんや娘さんはよく年中応援にきてくれたと思います。戦前は野球ファンは少ないし、今のように明るい華やかな感じではなかったです。

昔はそれに試合前にアトラクション的な催しがあったんです。アキレタボーイズやミルクブラザースなんかを呼んで。そういうことやらないとファンが退屈して帰っちゃうから。

尾崎先生のところへ何度か呼ばれたことがありました。とにかく井荻へ、尾崎先生のところへいくのは簡単で、上井草のグランドの裏というか横を通って、まっすぐずっといけばいい。男の足で十五分くらい。

その当時はね、みんな選手は洋服はひとそろいくらいしかもってないんだ、だからよそいきはかすりの着物に下駄ばき、三尺でね。カニやビフテキをごちそうになりました。てんぷらのときもありました。

そんな風にごちそうにばかりなっているんで、有馬さんの許可を得て、「幸楽」という料亭で、日頃応援してくれる三十人くらいの人を招待したことがあります。昭和十五、十六年頃くらいだと思います。そのときに尾崎家の皆さんや小西得郎さんもお呼びしました。

私が監督をしていた東京セネターズは宴会が好きなチームでしてね。ぼくらはもう賞金をもらうとすぐ宴会ですよ。（チームの）喜びを一人のものとしないでみんなで喜びあう、そんなとき無礼講だから、また酒をのんで騒いだあとのあと始末が大変でした。

セネターズのメンバーでいえばピッチャーの野口はまったくの別格、中学からきても通用する力をもってました。三塁手なら高橋、横沢七郎、大酒のみの北浦補手、レフトに織辺（由三、育英商）、センターに尾茂田（叶、松山商）、ライトに家村（相太郎、川越中）、村松（長太郎、浪商）、やりくりがつかないと（ピッチャーを休ませるということで）私が投げました。（笑い）

ぼくはつきあいっていい方じゃなかったんでね、むしろ人付き合いの悪い方だから。でも尾崎先生はもっとも仲のいいファンでした。

戦後、富士見高原（苅田氏は富士山麓と云う）時代の先生からお弟子さんらしい人を通して何度か連絡（電話）いただいたんですが、監督として遠征であっちこっちいったもんで。

でも、もう一度お会いしときたかった。

尾崎先生はものすごい情熱家でした。

とにかく私と会ってよくいわれたことは、「海は単調でね、変化がない」というんです。だけれども

「山は変化が多い」というんです。それでだ

から山登りが好きで、詩をつくったりするのには非常にいいんじゃなかったんですか。

ぼくも先生から「苅田くん、詩を勉強しなさいよ」っていわれた。（笑い）それでその気になったんだよ、なったんだけど頭の程度がちがうんで書けないんだよ。（笑い）

先生にとにかく激励された、というとおかしいけど、「勉強になるよ」っていうんだな。

自分もその気になったけど、短歌や俳句の五七調ならまだなんとかできるけど、そうじゃないんだから。一杯飲むとそういう話になったんだ。

だけどものすごく激情家というか、涙もろいとこがあって、それでぼくらももらい泣きして。選手の育成の問題とか、選手にアドバイスする材料をいろいろきかせてもらう訳です。うちで一杯飲みながらうおすきかなんかやって、そういう話になると涙流すんですね。涙もろいというか、ぼくらもそういう面があるから。ですから、物事に神経質な面もあったけど、共感するところがとても多かった。

のんでいたときでは、ヘッセがドイツを代表する詩人であることや詩のこともはなされました。その頃はもう「改造」や「中央公論」もっているとうるさかった頃だから。で、特高にあとつけられた、なんてこともききました。

あの頃は先輩後輩の差が歴然としてる。とくに六大学では礼儀作法は大変なものですよ。はっきりしてる。先生はそういうけじめがね、好きだったんだな。そしてチョッキみても帽子みても、おしゃれだったと思います。ヒゲをはやして編み上げの長靴（ちょうか）はいて――。

たしかに先生が山を愛したってことにも刺激されました。いまでも先生の顔だけは思い出せる、チャップリンひげで、頭も白いものが少し混っていたかな。

戦後出てきて各放送局でやる、いい金をもらう詩人がいるでしょう。お座敷でしょっ中かかっている音楽の。けれど先生の方の詩はいい金になんかならなかったよね、そういう時代に生きてきた人間だから「清貧に安んずる」ことの大切さ、そういう先生の問題にいきつく。人の情を非常に大切にしたよね。だから野球を通して、ルーツだな、自分がどんなもんだったか、先生を通して教わったな。

この原稿は一九八四、九、二四横浜でのインタビューに気軽に応じられた苅田氏との楽しい三時間のうち、尾崎先生との交友の部分をまとめたものです。表記上の統一などの他は原文のままです。（勝畑耕一・記）

（編集部注　当日の尾崎側出席者は、勝畑耕一氏、尾崎実子、栄子の三名であった）

尾崎栄子

附記

東京セネタース応援歌

尾崎喜八作詩
小松平五郎作曲

都の空の朝風に
はえある旗をなびかせて
ひたいに薫る青春の
その名も高き一軍は
これぞ知勇のますらおと
名にこそおえれ　セネタース
ああ　快戦す　東京セネタース

この応援歌が高々と流れたのは後楽園球場であった。発表年月日は現在手元に記録がなく、又三番まであった歌詞も不明で、ただ父が自分で写譜をし一番の歌詞が譜面に書き入れてあるものが残っているだけである。年代は昭和十五、六年と記憶している。二番の四連目から……不動の巨木打ち倒し／醜（しこ）の荒野に吠え狂う／百獣狩らん精鋭ぞ／ああ快戦す東京セネタースとあり、当時のイーグルス・タイガース・ライオン・巨人軍等を巨木や百獣に喩えて作ったのだと説明してくれたのを覚えている。

父はお相撲やスポーツ全般が好きで、よくラジオで聞いていたが、なかでも野球は自分が中学時代にしたこともあり、中等野球・都市対抗・六大学すべてよく聞いたり見に行ったりして楽しんでいた。そして当時の職業野球にのめり込んでいった。父は苅田久徳さんのプロ野球人としての気質に惚れこんでしまったのである。どこでどうして知り合ったのか私共もその最初の出会いは覚えていないのだが、苅やん〳〵と呼んで、その苅やんの率いるあまり強くない東京セネタースが可愛く

て仕方がなかったらしい。そして自然の事を学ぶ時にそうであったように、この野球に対しても家中（といっても母と私だけだが）総出で熱中しなければならず、又私達も夢中になって応援したものだった。母は父の留守中ラジオをききながらスコアをとらされるし、私は学校の帰りに後楽園に駆けつけ七八九回を観て帰って報告するというふうであった。

当時父は（四十六、七歳）家庭教師をしていて、西荻窪から目黒まで週に二、三回通っていた。セネタースの試合が第一試合で行われる時は目黒への行きがけに観戦に行くのである。苅田さんから毎年いただいていた家族パスと言うのを使って。だから尾崎さんに逢いたかったら後楽園に行けば逢えると冗談に言われる程であった。試合前に行われる約三、四十分のフリーバッティング・トスバッティング・シートノックの時、父はスタンドを降りて当時はベンチと言ったがダッグアウトのそばのフェンスに何気ないふうで寄りかかる。前日ラジオの漁業気象を記録して自分でひいた天気図により、先二、三日の天気を予想して行くのである。フェンス越しに苅田さんと二言三言ことばを交していたが、聞書きにもあるように投手起用の参考になるような事をアドバイスしていたのである。今では全く考えられないようなのどかなおおらかな風景であった。職業野球の選手も本当に地味なもので、ある時こんな事があった。

東京沼袋の苅田さんの家のすぐ近くに独身の選手ばかり住む寮があった。私はその日苅田さんと寮に住む選手たちとを夕食に招く為迎えに行くように言われて出かけていった。丁度その日はセネタースのミーティングが寮で行われる日で、選手達は全員部屋に車座になって監督からいろいろ注意されたり、アドバイスを受けたり、この先二、三戦の作戦などが行われていた。私は部屋の隅に坐って終るのを待っていた。打合せが終って一同にカツ丼が振舞われた。これはどうも彼等にとってご馳走のようであった。栄子ちゃんも一緒に食べなさいと言われ、私も輪の中に入れてもらった。会が終ると「サアこれから尾崎先生の所へご馳走になりに行こう」という苅田さんの一声で選手達はいそいそと支度にとりかかった。押入れから柳行李を引き出し、紺がすりの着物と兵児帯をとり出したのである。十四、五歳であった私は、そのつつましさ、質朴さに胸が熱くなったのを覚えている。中には当時各球団の脅威であったエース野口二郎投手もいたのである。

沼袋から新宿へ出て中央線西荻窪で降り十分程歩いて我が家まで、私はうきうきして案内していった。家では母がステーキの用意をし、ワタリガニをゆでて大皿一杯に盛り、父はそわそわと待ちかまえていた。当時も決して余裕のある生活をしていたわけではないので、きっと何か思いがけなく原稿料でも入った時にこんな楽しい集まりをしたのだと思う。

勝ち試合ごとに父は苅田さんと相談して、そのゲームの優秀選手に賞を出していた時期があった。その賞とは、なんと岩波新書だったのである。見開きに一々試合名や月日や選手名を書いて渡していた。きっと違った世界に少しでも眼と心を開いて欲しいという願いがあったのだろうと思う。

選手達は次第に次々に召集されて戦地に行き、その内の何人かは帰らぬ人となった。戦後父は信州生活も長かったので、野球はラジオできくだけ、多分一度も球場に足を運ばなかったと思う。不動の巨木打ち倒しと歌ったとおり晩年までアンチ巨人で通し、晩酌をしながらナイターの放送を聞くのが楽しみで、巨人と対戦しているチームを常に応援していた。鎌倉の家の二階からパチパチと拍手する音が聞こえてくるとじきに母がお銚子を持って降りて来て、巨人負けてるのよ、一本追加よ。とニヤニヤ笑いながらお燗をするのである。

セネタース軍が解散してから約三十年たって父が亡くなった時、それまで音信のなかった野口二郎さん、横沢七郎さん（後の審判）から弔電をいただいた。それを手にして母と私は顔を見合わせ、又新たに涙を流したのであった。

苅田さんの聞書きを思いついて、母や私を再び苅田さんにお会いできるよう取計らって下さった勝畑耕一さんに感謝申し上げる。そして「先生にもう一度お逢いしたかったなあ！」と言われた苅田さんのあのお顔と声は忘れられないだろう。

新聞・雑誌掲載目録(五)

昭和三五年—四九年

昭和三五年

《詩》

「無名の冬」 日本美術1
「飼育場風景」 放送文化3
「車窓のフーガ（串田孫一君に）」 アルプ9
「秋の日」 山と高原9

《随　想》

「心底からの鼓舞を与える」 東京新聞1・14夕
「欄外小品　1　こんな天気には・2　ベートーヴェンの時間」 アルプ2
「元旦に」 詩人連邦2
「晩春の午後」 読売新聞5・2夕
「富士見の夏草の果てに」 東京新聞6・18夕
「思い出から」 山と高原9
「詩と音楽」 暮しの手帖9
「戸隠への思い」 日本の屋根9
「木曽路を歩く」 東京新聞12・2、3夕
『野外と屋内』（連載①～⑦） 小原流挿花※1
●家と環境・晩春の或る午後　6
●孫　7
●小さい旅(1)　8
●小さい旅(2)　9
●詩の鑑賞　10
●夏から秋への一日　11
●故園の歌　12

《翻　訳》

「牧場の本」（K・Hヴッガール） アルプ3

昭和三六年

《詩》

「ウエストン師の百年祭に—一九六一・六・四朝　神河内にて作る」 日本山岳会・会報6
「七月の地誌」 アルプ9

《随　想》

「美ヶ原NHKテレビ塔」 NHK1・1
「思い出」 本の手帖10
「牧場の変奏曲—Thema・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」 アルプ11
「梓山のイワタケ」 読売新聞11・24夕
『野外と屋内』（連載⑧～⑯完）
●木曽の旅　1
●旅の小鳥と庭のツグミ　2
●冬晴れ　3
●早春　4
●日記から　5
●マドレーヌ・ロランのこと　6
●私の愛鳥週間　7
●日記から　8
●旅のたより　9
(附)写真「野外と屋内—旅の写真帖からの写真と文」 9
(附)写真「野外と屋内—多摩川の尾崎先生を訪ねる」 10

《評論・感想》

「山口耀久君のこと」 山と高原4
『広重・英泉　木曽海道六十九次（世界名画全集別巻）』（書評） 週刊読書人4・24
「深田久弥『わが愛する山々』」（書評） 週刊読書人6・19
「ツヴァイク、片山敏彦訳『人類の星の時間』」（書評） みすず7

昭和三七年

《詩》

「新らしき年に捧ぐ」 東京新聞1・1
「独り山に登る時」 毎日新聞1・5夕
「春興」 文芸春秋2
「『日々の歌』から—砂丘にて・ひとりの山・いたるところに」 アルプ2
「渓谷」 いづみ7
「早春二題—故園・受胎告知」 無限8
「花咲く頃（北原節子さんに）」 アルビレオ12

《随　想》

「出会いのよろこび」 大法輪1
「小さい傑作への讃歌（新春随想）」 国立博物館ニュース1
「『梓山紀行』から—一九六一年」 アルプ1
「自然とともにある故に」 放送文化1
「過ぎゆく時間の中で（片山敏彦追悼号）」 みすず1
「山の詩と山の詩人」 本の手帖2
「旅で知る妻」 旅4
「山小屋への思い」 アルプ4
「峠への道」 婦人之友5
「或る小さい体験」 アルプ7
「上高地」 旅8
「花崗岩の断片」 アルプ8
「ドビュッシーのパガテル」 同時代9
「蔵書と読書(一)」 創文10
「〃　〃(二)」 創文11
「音楽(一)」 創文12
「ある詩人の死—初冬の日記から」 産経新聞12・7夕
『自然手帳』（輪番連載・一年52回） 東京新聞・夕刊
1月　芝生の中の宝石4・イソギクの小曲11・水辺の一場景18・枯れ葉の歌25
2月　真冬のヒバリ1・ふるさとの水の上に8・波のように15・サラの上の早春22
3月　受胎告知1・町をゆく牧歌8・ヴェロニカ・ペルシカ15・まがきのほとり22・王朝風な時間29
4月　別れの笛5・山荘の森の灯12・美の哀愁19・世代の移り26
5月　初夏を色どる3・はつなつの歌10・あるメーデー歌17・警告24・自然詩人の花31
6月　セレナード7・高原の炎14・庭の裁断師21・水上の夏の歌28
7月　まろく、重たく5・渓流の美魚12・シャロンの野花19・霧のコルリ26
8月　夏の焦燥2・路傍のムクゲ9・空の黒片16・水を運ぶ母25・晩夏の詩の花30
9月　初秋の輪唱6・たそがれの夢13・貝しらべ20・誠実な訪問者27
10月　秋光さんさん7・寒気に追わ

れ11・充実と落下18・合戦尾根にて25
11月　信濃路の秋1・百合の木の歌8・美しい吸血鬼15・カラマツ荘厳22・賢者の石29
12月　野性を恋う6・微生物に思う13・冬にもなお緑20・年輪の含蓄26

《評論・感想》

「薗部澄『写真・中仙道』」（書評）　週刊読書人11・5
「職員文芸・随筆選評」　関東信越国税旬報5・11、21

《翻　訳》

「水彩画をかく」（ヘッセ）　アルプ10

昭和三八年

《詩》

「或る山頂にて」　山と高原1
「老木の頌」　産経新聞1・3
「新年の丘にたちて」　自由民主新聞1・8
「冬夜」　山と高原2
「夏への準備」　歴程3
「岩を研ぐ」　山と高原3
「或る春の日に」　山と高原4
「草の上の歌」　山と高原5
「牧場の思い出」　優駿5
「山上の朝」　新潟日報7・1
「大正池の朝」　旅8
「出会い」　山と高原8
「上越線にて」　山と高原9・10（合）
「田舎のモーツァルト」　文芸春秋10
「峠の試作（押韻一四行詩）―馬籠峠・和田峠」　アルプ11

《随　想》

「シューベルトの歌」　東京新聞2・4
「カロッサの詩集」　週刊読書人2・4
「バッハへの思い」　音楽之友4
「私の自然手帳㈠―春を呼ぶ・環境論と履歴説・ネコヤナギ」　創文4
「詩と言葉」　学鐙4
「私の自然手帳㈡―タンポポ・ヒキガエルの春・車窓の妙音」　創文5
「八ガ岳山麓」　NHK5・1
「私の自然手帳㈢―三光鳥・花の写生」　創文6
「ウエストン祭の感激」　読売新聞6・7夕
「私の自然手帳㈣―霊感・自他・針小棒大」　創文7
「高原をわたる笛の音」　日本経済新聞7・28
「私の好物―くわいのうまに」　朝日新聞8・18
「谷間の憩い」　郵政9
「高原の秋の歌」　潮10
「秋の歌」　朝日新聞10・2夕
「バッハの感動」　東京新聞12・16夕

《評論・感想》

「周はじめ『牧人小屋だより』」（書評）　婦人之友2
「ヘッセ、高橋健二訳『人生の歌　回想の手記』」（書評）　週刊読書人5・13
「座談会・佐藤惣之助について―伊藤信吉・金子光晴・城左門・草野心平・村野四郎」　無限10
「『アリアドネの糸』―片山敏彦の日記」（書評）　読売新聞11・14夕
「職員文芸・随筆選評」　関東信越国税旬報1・21　2・1　3・11、21　4・1　6・11

昭和三九年

《詩》

「ヒマラヤの空に思う」　信濃毎日新聞4・19
「山に来て」　いづみ7・8合
「体験」　アルプ8

《随　想》

「平安と喜びとをもて」　読売新聞1・6夕
「詩のある旅路・途上のまなざし」　旅3
「バッハとシュッツ」　レコード芸術3
「生活の中のバッハ」　アルプ4
「私の自然手帳㈤―春を待ちつつ・荒野に呼ぶ声」　創文4
「ベートーベン民謡集」　朝日新聞6・23夕
「上高地での体験―テレビ・ロケとウエストン祭」　朝日新聞7・6
「祝詞にかえて」　馬酔木7
「わが愛誦の詩歌―回想（ヘッセ）」　婦人之友8
「わが詩集わが人生」　読売新聞8・16
「わが愛誦の詩歌―女囚と老人（カロッサ）」　婦人之友9

《評論・感想》

「千家元麿全集・上巻」（書評）　日本読書新聞6・1
「職員文芸・随筆選評」　関東信越国税旬報4・11、21　5・21

《翻　訳》

「菩提樹の花」（ヘッセ）　創文2

昭和四〇年

《詩》

「詩二篇―秋・鴨」　アルプ1
「冬の雅歌」　文芸春秋2
「高原早春」　旅5
「春二篇―岩を研ぐ・春の葡萄山（甲州勝沼所見）」　歴程6
「三つの歌―ロケーション・冬の雅歌・モーツァルトの午後」　アルプ7

《随　想》

「今と昔」　フィルハーモニー3
「思い出の花たち―セツブンソウ・イワウチワ・イワカガミ・ホテイラン」　アルプ3
「若き日の友の姿」　本の手帖4
「私の図鑑」　日本読書新聞5・24
「私の近況」　小原流挿花6
「ウエストン祭と小鳥」　いづみ7
「フルートの音色」　日本経済新聞7・21夕
「グラビア―高原の詩」　婦人之友8

《翻　訳》

「ティロールの山こえて㈠」（フランク・S・スマイス）　アルプ4
「ティロールの山こえて㈡」（スマイス）　アルプ5
「ティロールの山こえて㈢」（スマイス）　アルプ6

昭和四一年

《詩》

「私の元旦」 自由民主新聞1・5
「春の詩篇―アイヘンドルフ再読・よみがえる春の歌」 山と溪谷5
「されど同じ安息日の夕暮に(孫、美砂子に)」 アルプ5
「ある音楽会で」 アルプ6
「或るイメージ」 アルプ7
「森林限界」 小説新潮8
「詩人と笛」 文芸春秋9
「九月のクルミの木の下で」 アルプ9
「晩年のベルリオーズ」 世界像10

《随　想》

「冬と音楽の思い出から」 アルプ1
「『ベートーヴェンの生涯』(ロラン)―熱烈に生きた青春の宝」 音楽之友3
「森の歌」 アルプ4
「デュアメルのかたみ」 東京新聞4・16夕
「雑草」 毎日新聞5・26夕
「思い出の人々」 アルプ6
「浅間山麓の一日」 学鐙7
「清閑記―雑草・『思索する心』・新しい印章・たまたまの余暇」 アルプ8
「雲と草原が話しかける美ヶ原」 旅9
「高村さんとの出会いの初め」 春秋10
「道二題」 アルプ11

《評論・感想》

「串田孫一『思索する心』」(書評) 読売新聞6・2夕
「座談会・ヒューマニズムの詩と詩人―伊藤信吉・山室静」 文学8
「職員文芸・随筆選評」 関東信越国税旬報4・1　5・21

昭和四二年

《詩》

「元旦の散歩」 いづみ1
「新居元旦」 自由民主新聞1・5
「去年の春に書いた詩二題―復活祭・晩年のベルリオーズ」 アルプ4
「回復期」 小説新潮10

《随　想》

「笛とレコード」 FM fan5
「再生の歌」 朝日新聞8・8夕

《評論・感想》

「くしだまごいち『ゆめのえほん』」(書評) 週刊読書人1・30
「曽宮一念『東京回顧』」(書評) 週刊読書人5・22
「職員文芸・随筆選評」 関東信越国税旬報4・21　5・1、11、21　6・21

《翻　訳》

「オーヴェルニュ」(アジャルベール) アルプ5

昭和四三年

《詩》

「元日の朝」 P・H・P1
「きらびやかな老いの朝」 アルプ2
「はるかな泉」 いづみ2
「明月谷」 ハイカー2
「尾崎喜八小詩集―されど同じ安息日の夕暮れに・アイヒェンドルフ再読・よみがえる春の歌・音楽会で・或るたよりから」 歴程4
「古い地図を前に・岩雲雀の歌」 アルプ8
「上高地にて」 文芸春秋8
「雲表の十月」 旅10

《随　想》

「北鎌倉ノート―モーツァルト・音について」 アルプ1
「モーツァルト」 フィルハーモニー1
「信州の酒に寄せて」 日本の屋根1
「賢治を憶う」 小原流挿花1
「古寺を見直すわが鎌倉住い」 旅3
「スカルラッティ」 ピアノ通信6
「夏山讃歌―上高地」 東京新聞7・2夕
「死と乙女」 朝日新聞8・11
「山と音楽」 本の手帖10
『音楽と求道』(連載①～⑫) 芸術新潮
●「詩と農夫」への願い　1(月号)
●私のタンドレス・プルミエール2
●冬の雅歌　3
●二つの星―ロランと高村光太郎4
●音楽に寄す　5
●「白樺」とベルリオーズ　6
●T子の死　7
●ベートーヴェンを歌う　8
●高田博厚との出会い　9
●新しき土地にて　10
●嵐の後の牧人の歌　11
●畑中の小さい巣　12

《評論・感想》

「座談会・流儀をもってくらそう―萩原徹・片岡球子・村口昌之」 婦人之友10

昭和四四年

《詩》

「鈴」 いづみ2
「Poémes intimes―或る新らしいレコードに寄せて・小さい散歩から・勉学篇・『復活祭オラトリオ』から・斯くしてまた・エリュアール」 歴程3
「山が待っている」 毎日新聞6・2夕
「安達太良山の空の下で―妻に代りて」 いづみ9

《随　想》

「白山小桜の歌(おりおりの日記から)」 アルプ1
「山は離れど」 アルプ6
「おおるりこるり」 旅6
「二十回目のウエストン祭」 旅8
「秋の山にて」 山と溪谷9
「オルゴール」 現代の眼9
『音楽と求道』(連載⑬～㉔)
●『荘厳ミサ』をきく　1
●ベートーヴェンの誕生日に　2
●小さな美しい集まり　3
●復活祭の日に　4
●二つの『マタイ受難曲』　5
●雲とともによみがえるもの　6
●私の音楽と妻の音楽　7
●フーゴー・ヴォルフの歌　8
●富士見高原に想う　9
●高原の子供の歌　10
●信濃の人たちと共に　11
●聖母マリアの嘆きの歌　12

《評　論》

「オカール『モーツァルト』・ブーク『ベ

ートーヴェン』・マルセル『バッハ』」（書評）週刊読書人3・10

昭和四五年

《詩》

「旅情三篇―浄土平・春愁・その空の下で（妻に代りて）」アルプ1

「詩二篇―孫らを遣りて・黄道光」アルプ4

「安らぎと広がりの中で・詩『無常』の作者に」アルプ10

「山の新雪」旅10

《随　想》

「わが生の伴侶―歌」現代ギター1

「私の語学独学自習」婦人之友1

「通信講座と自然番組と」朝日新聞1・3

「私とベートーヴェン―よみがえる希望」レコード芸術7

「わたしの心の山」信濃毎日新聞7・1

『音楽と求道』（連載㉕～㊱）

●ヘンデルの『メサイア』1

●ジャック・ティボーの「ヴァイオリンは語る」2

●歌による心の旅路　3

●人間の情の映り　4

●神々しい楽園の歌　5

●善に通ずる美　6

●一日の果ての宵の明星　7

●わが『イタリアのハロルド』―乗鞍高原にて　8

●シベリウス『交響曲第六番・七番』9

●同族の魂　10

●ベートーヴェンの小さい花園　11

●安らかなる眠りのために　12

《評　論》

「足立源一郎『スケッチ帖・日本の山旅』（書評）週刊読書人8・10

昭和四六年

《詩》

「誓いの歩み」文芸春秋1

「遠い日の山小屋―大日小屋（金峰山）・行者小屋（八ガ岳）・七丈ノ小屋（東駒ガ岳）・将棋頭ノ小屋（木曽駒ガ岳）」アルプ11

「高原で」いづみ11

《随　想》

「ピアノに寄せて」ピアノ通信1

「バッハの音楽」アルヒーフ2

「昔の仲間」アルプ3

「物を書く楽しみ」朝日新聞5・17

「夏の花」植物と文化1971・夏

「クープランとラモ」音楽の窓9

「私の朝」婦人之友10

「きれぎれの思い出」アルプ12

『音楽と求道』（連載㊲～㊽）

●トリオ・ソナタの夕べ　1

●古沢淑子さんのスタディオで　2

●一月の三つの誕生日　3

●魂、そのめぐりあいの幸福　4

●善き音ずれ　5

●受難楽の夕べ　6

●高き潮のごとく　7

●山岳的シューベルト　8

●クルプとゲルハルト　9

●ヴィルドラックの死　10

●ついに聴いたフィガロ　11

●ピアノ三重奏の夕べ　12

『表紙によせて』（連載①～⑪完）小原流挿花

●フォッサマグナ　2

●亡びゆく昔の美　3

●荒川岳と雷鳥　4

●穂高のわさび田　5

●諏訪湖　6

●上高地にて　7

●白馬大池あたり　8

●姫川峡谷地帯　9

●木曽路　10

●親不知海岸　11

●夜叉神峠　12

『わが庭の寓話　デュアメル・尾崎喜八』（連載①～⑧）ガーデンライフ※2

●無心の庭・ポアズの目ざめ・放棄された蟻塚　5

●腹黒・ジャム・墓所の選定　6

●旅行の必要・性格の強さ・完全のための弁護　7

●私は見た、彼ら二本の実桜が・ニューヨークの群衆・古い木の柱の歎き　8

●港での難波・霞む眼をした馬・節制の法則・果実の神（ポモーナ）　9

●砂糖大根の反逆・英国式教育の危険・ひるがお（一名昼間の麗人）　10

●うぬぼれた植樹者・償いがたい損失・殺す　11

●矯正し得ぬことども・ディック、或いは義務の観念・憂鬱な仕事　12

《評論・感想》

「尾崎喜八（対談・富永恒雄）」現代ギター4

「花の電話　尾崎喜八＋串田孫一」ガーデンライフ4

「武田久吉『明治の山旅』（書評）週刊読書人7・26

「山と文学（アルプ教室講演S45・11・1）」アルプ8

昭和四七年

《随　想》

「私の青春とともに暮したレコード」レコード芸術1

「山と心」小原流挿花8

『音楽と求道』（連載㊾～㊿完）

●妻に　1

●二人の女友達とモーツァルト　2

●ヘルマン・ヘッセと共に　3

●晩年のベルリオーズ　4

●わが慰めの音楽　5

●愛のない情事　6

●パイヤールと今日　7

●バロック音楽と私　8

●対照的な二つの生命！　9

●シュッツに打ち込む人たち　10

●フールニエの演奏　11

●おんみ優しき芸術よ　12

『わが庭の寓話　デュアメル・尾崎喜八』（連載⑨～⑳）

●鼠狩・更に大いなる力の場合・哲学者の夢　1

●実例の力・主人の耳・蜜蜂と蜘蛛 2
●群衆中の苦悩・一匹の猫からの教訓・若い病人 3
●郷愁の書取り・我ら、別の文明が・季節・招待状 4
●エレオノール、又は誠実な魂・均衡の法則・怠け者の生徒のための口頭弁論・愛の眼 5
●逆境の利益・感傷的な散歩、又は緑の贈り物・節操なき者 6
●能力についての短い問答・流寓の苦しみ・使者・しあわせな道路・路上の話題 7
●徳の曲折・繁栄の法則・天使の喇叭・八月四日の夜 8
●成功の苦味・祈っている牝山羊・現世的な富の軽蔑・三つの格言 9
●世界の音楽・打ち捨てられた墓・丘と川 10
●無作法者・詩人と獅子・利口な花売り娘 11
●権力の哲学・アリースと老人たち・慎重な寄食者 12

《評　論》

「庄野英二『愛のくさり』」（書評）週刊読書人5・1

昭和四八年

《詩》

「詩二篇―音楽に寄せて・詩を書く」アルプ1
「生活三態―オルガンのしらべ・浜辺で・朝のコーヒーを前に」歴程大冊6

《随　想》

『わが庭の寓話　デュアメル・尾崎喜八』（連載㉑～㉒完）
●ささやかな報償・寓話の愛好者・庭の戒め・又の世のための草案・夕べの風のためのコンチェルト1
●「寓話」との語らいの末尾 2

昭和四九年

《詩》

「梓川の歌（遺稿）―鵬雲崎・飯盒飯」北の話4

《随　想》

「ヘルマン・ヘッセと『ヴァンデルング』」レジャーアサヒ2・20

註

※1各連載とも年内掲載を一括して列記する。小題末尾の数字は、雑誌では月号、新聞では日付を表わす。
※2この作品は全篇に於て、尾崎が訳したデュアメルの文章と、その文章を尾崎風に翻案した短文とで構成され、併せて訳文に註釈を附けている。（後に『わが庭の寓話　デュアメル＋尾崎喜八』となって、S51・8・30四季書館発行）

附　記

嘉納忠明

目録㈥は、尾崎の上野毛時代の後半から生涯を終わる北鎌倉時代に当っている（六八―八二歳）。

この間、尾崎は晩年と雖も実に弛みなく創作を続け、充実した成果をあげている。その一つに、以前にはみられなかった連載随想がある。とりわけ、S43年から48年の最晩年にかけて三題が集中し、中でも『音楽と求道』（完了後直ぐに『音楽への愛と感謝』と改題されて刊行）は、「芸術新潮」にまる五年間続けられ、尾崎の代表作の一つとなったのである。

『音楽と求道』と関連することであるが、この期には山歩きも少なくなり、替って音楽に心を寄せた随想が増しているのも一つの特徴である。

一方、詩作の面ではやや少なくなっているとはいえ、依然続けられており、そこに老年詩と呼ぶことも可能な作品が現われてくる。これについて尾崎は、『田舎のモーツァルト』の「後記」の中で、「私は多くの詩人が、その年齢を重ねるにつれて詩作から遠ざかり、詩を捨てる事実を常に遺憾なことだと思っている。……老境からはまた若年や成年の時には書けないような作品が生まれ得るものだと信じている」と述べ、詩が青春の特権のように思われてきた傾向に疑問を投げている。この尾崎の考えと同様に、かつて室生犀星が「詩は生がいの間書きつづけられるのが本統である。……段々年齢が高まり心が深くなるに従ふて詩もすんで行くことは必然である。」（「雅俗談叢」報知新聞T15・8・8）と言ったことがある。この二人のような考えは、未だ詩評の中では余り取上げられていないようにみられる。尾崎の作品をかかる観点から検討することは、彼の文学姿勢と相俟って欠かすことができないであろう。一人の詩人の評価は決して高揚期や問題作のみにあるのではない、と編者は考えている。なお、現在、残存している喜八の下書きノートを検証しつつあるが、それによると今回記載したもの以外にも、多くの執筆を行っていることが判明している。しかし掲載先は依然調査中である。今後、「補遺」にて追加していきたい。

目録・補遺

「勇気と好意（デュアメル『七つの最後の傷』より）」報国昭8・11
「十二月」（詩）報国昭8・12
「野鳥の夏の夜」（ドゥラマン）動物文学昭10・6
「『野鳥ガイド』（中西悟堂）を読んで」野鳥昭13・4
「『五月の太陽』読後感」綴方学校昭13・8
「阿蘭陀組曲」（デュアメル）芸林昭13・10
「Wild life の本」動物文学昭15・5
「達磨無用」（詩）ちから昭19・9・1
「職場の文芸・詩選評」ちから昭19・10・11、11・21、20・6・1、11・21
「幼者の道づれ」朝日新聞昭30・7・19夕
「若葉の庭」（詩）朝日新聞昭34・5・17
「日本昆虫記」（書評）読売新聞昭34・8・2

この一年のできごと

二月六日、生前親交のあった方々によって、蠟梅忌第十四回が東京青山の青山荘で行われた。司会＝伊藤海彦氏、お話＝「富士見時代の思い出」川嶋利哉氏・岡田朝雄氏、「富士見に尾崎喜八記念館の建つ兆しの報告」中山政市氏。参加者約八十五名。

六月二十四日―二十六日、霧ケ峰ヒュッテジャヴェルに於て「みずならの会」初夏ゼミナール、参加者二日間延九十五名。講義＝「山、その生い立ち」伊藤和明氏、「山の詩」田中清光氏。湿原・草原の植物観察、鳥の観察、自然のスライド観賞、懇談会。

八月十四日、長野県諏訪郡富士見町教育委員会より、仮称「尾崎喜八記念館」を町として設立の意向ありと申し出を受ける。教育長、教育次長尾崎家来訪、富士見尾崎会より二名立合。

八月二十八日、長野県諏訪郡富士見町高原の森で、第九回碑前の集い。参加者約七十名。

富士見「尾崎喜八記念館」設立実行委員会を十月一日富士見で、十月二十六日東京で開く。実行委員は、富士見町側から五名、富士見尾崎会中山政市・名取正人、東京側から尾崎喜八研究会伊藤海彦・伊藤和明の各氏と尾崎家から一名の計十名とする。

「研究会」の歩みを見守っていただいていた長老、山本健吉・山本太郎・草野心平氏を相次で喪う。

編集室から

草野、山本両氏への哀悼の辞

「尾崎喜八資料」第五号をお届けいたします。この号の集稿が終わる直前になって「蠟梅忌」「資料」の出発に一方ならずお力添えを下さった方々が、次々に亡くなられました。そこで、異例のこととは思いますが、この方々への哀悼の念を示すべく、急遽、富士川、伊藤両氏にご無理をお願いした次第です。

草野、山本両氏に山本健吉氏を加えたお三方ともに、かつて尾崎の葬儀の折りには会場で弔辞をお読み下さった方々でした。

尾崎記念館のこと

時の流れを感じさせるもう一つのご報告は、長野県諏訪郡富士見町の「仮称・尾崎記念館」建設への動きのことです。尾崎実子が富士見・若宮の古い農家を借りて、毎夏をそこで過ごすようになってから七年がたち、かつて尾崎を囲んだ方々との旧交を暖めてまいりました。その交わりの中で夢として語られていたことが、やがてごく自然な形で実現へ向けて動き出したのが、この記念館建設への気運です。こうした気運の盛り上がりには、富士見尾崎会の方々の一方ならぬご尽力がございました。また町にとっても、毎年八月の碑前の集いなどを通して尾崎の仕事が親しいものになっていたと思います。こうした積み重ねが今一つの形となりつつあることを感じます。

尾崎の遺族は、すでに多くの資料をこの記念館に寄託する心積もりでおります。しかし町の次年度の予算審議が八八年十一月末にあり、記念館についてはすべてがそこからスタートという事情もあり、残念ながら今回は全容をお伝えすることができません。次号にて詳細をお伝えいたします。

今後実現に向けて、研究会にも資料・企画などさまざまな面で協力が求められることになると思いますが、その節はどうかよろしくお願い申し上げます。

今号の執筆者のご紹介

今回はこの記念館建設のことも含めて、富士見から中山政市氏にご寄稿いただきました。中山さんは富士見駅前の呉服店「大丸屋」のご隠居。尾崎との交友は「分水荘」時代以来で、現在、富士見尾崎会の代表でおられます。

また、特集「自然についてのエッセイ」の頃（戦前）の尾崎をよくご存じの登山家川崎精雄氏に当時についてご寄稿いただきました。

お二方とも八十歳を越えるご高齢にもかかわらず、いつお目にかかっても矍鑠としておられます。

（'88年11月20日、石黒敦彦記）

尾崎喜八資料・第五号
一九八九年二月四日発行・非売品
ISSN 0911-3339
発行・尾崎喜八研究会
鎌倉市山ノ内一九七―五一（〒247）
電話〇四六七（二三）一七六一
振替 横浜7-33012尾崎喜八研究会
印刷・住友出版印刷